
魔法少女リリカルなのはVivid～深緑の輝きは癒しと未来を創る光～

サラマンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはVivid／深緑の輝きは癒しと未来を創る光／

【Nコード】

N9106N

【作者名】

サラマンド

【あらすじ】

JS事件、ひいてはニールがサーシェスとの因縁に決着を着けてから4年、彼は妻のなのと同じ教官となって一家の大黒柱として毎日働いている。そしてヴィヴィオも成長して幸せな日々が続いていた。そんなある日、小さな事件から鮮烈な物語は始まる――魔法少女リリカルなのは／深緑の狙撃手VS赤き傭兵／（なのはルート）の続編で、Vivid×劇場版機動戦士ガンダム00／Awakening of the trailblazer／のク

ロスオーバー小説です。 ※更新が不定期です。

プロローグ 幸せと新たな命（前書き）

今回は劇場版のネタバレはありませんが、次からは入るかもしれないのでご注意ください。

というより、これを投稿した頃はまだ映画を見ていません。

なら投稿するなという突っ込みは無しで。

プロローグ 幸せと新たな命

―JS事件と呼ばれたあの戦いから4年が経った。

あれから俺は時空管理局・戦技教導官として管理局の魔導士を鍛え、新開発されるデバイスのテストユーザーをやるという仕事をしている。

サーシエスとの決戦後にケルディムにイノベーターになったことを教えられてからその能力についても教えてもらった。ただ、能力以外の詳細について聞いても答えてくれなかった。あまり気にしてないが…。

俺の妻の高町　なのはも戦技教導官だが、現在は妊娠中で育児休暇を取っている。どちらにしても、長年の無茶もあって休ませるつもりだったのだ。もうお腹が目立つぐらいに膨らんで、予定ではあと1ヶ月以内となっている。

何の偶然か、俺と同じ双子なのだ。性別はまだ分からない。だが、双子の義姉になるヴィヴィオはしゃぐ位に喜んでいたのは記憶に新しい。

だが俺は家にいる時間が少ないため、隣に住んでいるフェイト、六課でヴィヴィオの世話も頼んでいたアイナさんに偶に来てもらっている。二人には感謝してもしきれない。

ヴィヴィオは俺となのはの養子となった際に本人の希望でヴィヴィオ・D・高町と名乗ることになった。

家は一戸建てを俺となのはで金を出し合って購入した。

そんな感じで、今は大きな事件もなく（ニールはマリアージュ事件に関わってない。）三人暮らしで幸せに暮らしている。

少なくとも今は…。

ヴィヴィオside

私の名前はヴィヴィオ・D・高町、St.（ザンクト）ヒルデ魔法学院初等科4年生。

公務員のなのはママとニールパパとの三人暮らしで仲良し親子です。でももうすぐで二人家族が増えます。楽しみだなあ、私お姉ちゃんになるの！

で今は友達のリオとコロナと一緒に校舎の中を歩いています。さっきまでクラスが一緒なのが分かってはしゃいでついハイタッチしてました。

ちょっと恥ずかしかったけど…。

「ヴィヴィオ、そういえばヴィヴィオのお父さんに会ったこと無い

んだけどどんな人なの？」

そう、パパは凄く忙しくてリオやコロナにまだ紹介出来ていません。

「パパはママと同じで優しくて強いの！何より大きくてカッコいいんだよ！！」

ゆりかごで赤い悪魔にママが斬られそうになった時に守ってくれたあの大きな背中は今でも覚えてる。

だから、私はママやパパのように強くなりたい！

真っ直ぐ、ただ真っ直ぐに…！

この物語はヴィヴィオ・D・高町ディランデイの鮮烈な物語であり、ニール・デ
イランデイのかつての仲間たちとの再会と戦いの物語でもある。

魔法少女リリカルなのはVivid

×

劇場版機動戦士ガンダム00

Awakening of the Trailblazer

（先駆者の目覚め）

魔法少女リリカルなのはVivid（深緑の輝きは癒しと未来を創る光）

始まる！

プロローグ 幸せと新たな命（後書き）

次からマイスターズが一話毎に一人ずつ登場します。

第1話 覇王と成層圏を狙い撃つ男（前書き）

お待たせしました。遂に物語に入りました。

ただし、劇場版のネタバレが多聞に含まれていますのでご注意ください。

次回は本編のアインハルトVSノーヴェとアレルヤが飛ばされた話を書きます。

なお、アインハルトのイメージCVは誰がいいか、そのアンケートを取ってます。既に活動報告に書き込んでありますので、回答する人はそちらを読んで下さい。

第1話 覇王と成層圏を狙い撃つ男

―まだ午後2時と日が高く昇っている頃、俺は白い教導官用の制服が汗ばむのを気にせず走っていた。武装隊教導訓練を終えたばかりもあって疲労も一潮だ。

「はあ、はあ、ただいま!」

そう言っただ俺はブラウンに塗られたドアを開けて、体を落ち着かせながら今から3年前から住んでいる我が家に帰ってきた。

「お帰り、二ー。そんな息を荒げて大丈夫なの?」

リビングから黄色のエプロンを付けたのは出てくる。そのお腹は見てすぐ分かる位に膨らんでいる。そう、なのは妊娠している。もう10ヶ月は経過してて、いつ陣痛が起きてもおかしくない状態だ。

「ふう……おう、体調はどうだ?」

「問題なし、元気いっぱいだよ!」

笑顔で腕を少し上げるのはだが、俺は靴を手を使わず足で器用に脱いでなのはを抱き締める。

「そう言いながらお前は無茶するから急いで帰ってきたんだよ。」

「もう……バカ。」

そう言いながら抵抗せずに受け入れる辺り自覚はある。十中八九、性分でなかなか直せないということだ。

俺はしゃがんでなのはのお腹を優しく擦る。

「もう少しで産まれるな。」

「うん。」

そこに桃色の羽を出したレイジングハートが宙を浮きながらこっちに移動してきた。

「マスターとお腹の赤ちゃんのバイタルは異常ありません。」

レイジングハートには今、ヴィヴィオの魔法の基礎の勉強を手伝ったり、なのはのお腹の子供の体調管理をするなど色々やってもらってる。そのため、羽が付いた状態で単体飛行が出来るようになってる。

＞サンキュー、レイジングハート。＜

レイジングハートにお礼を言いながら再びなのはのお腹を擦る。この子たちが産まれる頃にはもっといい時代になるように、今俺たちは頑張っている。当然、そこにはヴィヴィオやナンバーズたちも含まれる。

なあ、お前らは今どうしてる？

刹那、アレルヤ、ティエリア、そして…ライル。

ヴィヴィオside

St. ヒルデ魔法学院初等科・中等科棟 図書館

今私は図書館でさっき送ったメールの返信を待っています。

送ったのは教室で撮ったりオとコロナの記念写真。

パパとママ二人は勿論、ママのママの桃子さん（お祖母ちゃんと言ったら何故か士郎さんが首を閉められていたのでそう呼ぶのは止めた。）、ギンガさんとパパの友達のヴァイスさん含めた元機動六課の皆さん、聖王教会のカリムさんとセイン、無人世界カルナージに住んでいるルールー、ストライクアーツを教えてくれるノーヴェです。

皆さんのおかげで今でもヴィヴィオは元気ですという感謝を込めて…。

次々と「仲が良いね」とか「いい友達見つけたね」とか「いい友達見つけたね」など返信が返ってくる中で、二ールパパから返信が最後に返ってきた。

「その子たちか、ヴィヴィオがいつも楽しそうに話していた友達は。いい子たちじゃないか。実は近々1日休みが取れそうなんだ。」

と私がパパのメールの内容を読み上げたら、

「ねえねえ、私ヴィヴィオのお父さんに会ってみたいな！」

「私も会いたい！」

とリオとコロナが食いついてきた。

「だって、お母さんの話を話す時のヴィヴィオは楽しそうなんだけど、お父さんの話を話すと決まって目が輝いてるんだもん。」

「だから私もリオもどんな人なのか実際に見てみたいんだよ。」

わ、私そんな風に見えたんだ。うわー、ちょっと恥ずかしくなってきた…。

でも、本当に二人とも私の憧れ。

だから私もそんな二人のようになれるよう、毎日頑張っている。

最初は独学だったけど、今はノーヴェと一緒に修行をやっている。

そういえば、ママがメールで「早めに帰って来るとちよっと嬉しいことがあるかもよ」って言ってたんだっけ。

帰った後が楽しみになってきた！

ライルside

終わった…本当に、終わった。

奴ら、ELSの母体が集まって黄色の中東に咲いている花の形に変わった事で戦いは終わった。

つまり刹那が対話を成功させたという事だ。

本当にギリギリ、俺のサバーニャは武器は右手のライフルビット一つのみで左腕も右足もない半壊状態だった。

「ふう、お疲れさん。」

俺をサポートしてくれた青ハロとオレンジハロに労いの言葉を伝える。

>>オツカレサマ、オツカレサマ。<<

「他の皆は？」

>ロックオン、大丈夫？<

「フェルトか、俺は大丈夫だ。そっちとアレルヤは？」

>トレミーはクルーは無事だけど、艦がもう使い物にならないの。
あとアレルヤとマリーさんも無事だけど、ハルーツは大破しちゃったんだって。<

ということは、今動けるのは俺の機体だけか。

「刹那はどうした？」

と刹那の事を聞いた途端、右側のモニターから制服姿のティエリアが映った。

＞刹那はELSの母星へと対話をする為に旅立った。おそらく戻ってくるのは50年は掛かるだろう。＜

…その頃じゃ俺はもうじいさんになってるか死んでるかだな。

「そうか。なら今からアレルヤたちを拾ってからトレミーの皆を…何だ!？」

サバーニヤを移動させようとしたその時、突然目の前にブラックホールのようなものが現れ、機体ごと飲み込まれていった…。

アインハルトside

私は、ベルカ古流武術を流派とするアインハルト・ストラトスといえます。

今、私は街頭試合を格闘系の実力者を倒すために、武装形態へと姿を変えて移動しています。

今回はストライクアーツ有段者であるノーヴェ・ナカジマさんを狙うことにしています。

と移動していたら突然、上から何かが落ちてきました。

「きゃあ！」

でも考え事をしていて気付くのが遅れてしまい、下敷きになってしまいました。

「ううつ、一体何が…？」

体を起こして何が落ちたかを見ると、茶髪で肌の白い男の人が私に覆い被さるように倒れていました。

「う、うん…アニュー。」

と男の人が何故か右手を伸ばし、武装形態の私の右胸を掴んで…

右胸を、掴んで…？

「~~~~~！！？」

一気に頭の中がピー！という音がしてもおかしくなくらいに沸騰して、脳天に加減をした『霸王断空拳』を叩きつけました。

「どはっ、何す…ってわ、悪い、すぐに退く！」

気が付いた男の人は慌て私から離れました。

「そ、その…貴方は何故上から落ちてきたのですか？」

私は胸を掴まれた事に動揺し睨みながらも男の人にこうなった経緯を聞くことにしました。

だけど、その答えが予想外でした。

「上から…？それこそ俺が聞きたいくらいだ。俺はずっと戦っていたんだからな。」

戦っていた…つまりは管理局の魔導士？でもそれだったら私を捕まえようとするはず。

「それより、ここは何処だ？地球にこんなにはっきり惑星なんて見えないはず…だよな。」

よく分からないけどさっきの話からして、この人は授業で習った次元漂流者かもしれません。

でも何だかこの人はどこかで見た気がします。それも時空管理局関連で…。

確か、4年前に多くの犠牲者を出し、恐れられた赤い悪魔を倒したという英雄が茶髪で青い瞳で背の高い男の人だと聞いたことがあります。

だから…

「私はアインハルト・ストラトスといいます。なので貴方の名前を教えてください。」

私の名前を聞いた途端に初めて驚いた表情を見せたものの、すぐに飄々とした態度に戻った。

「まさか名字がストラトスとはな。俺の名前はロックオン・ストラトスだ。よろしくな、アインハルト。」

「ではロックオンさん、お手合わせをお願いします。」

霸王であるこの身が強くあることを証明するために英雄と呼ばれる貴方を倒させていただきます！

それに、さっきのセ、セクハラはまだ許してません！！

ライルside

突然サバーニヤごとブラックホールみたいなものに飲み込まれた俺は一度気絶した。で気が付くとそこにはライトグリーンの髪と妙な格好をした見た目が18歳ぐらいのお嬢ちゃんが気絶していた俺に押し倒される形になっていた。

慌てて離れて周りを見たら空も大きな恒星が見えたり景色も見たこともない形のビル群と地球と明らかに違う。

しかも俺の格好はパイロットスーツではなく、ソレスタルビーイングの制服だ。

だが、そんなのは問題じゃない。

今の問題は、目の前の嬢ちゃんが襲ってきていることだ。

正直、何で襲われているのか分からない。

「ちょっ…うおあつ、危ねえなおい!!」

右ストレートやハイキックを紙一重で避ける。

さっきまでELSと戦っていたから、すぐに見切れるがなかなか速い!

「…避けるとは、やりますね。ですが、これはどうですか?」

バックステップで距離を取ろうとした途端、俺の右腕からライトグリーンの色をした光の鎖が現れた。

当然、俺は対処できずに腕を拘束されてしまう。

そこに左ストレートを繰り出してきたアインハルトの拳を左手で掴む。

何てパンチしやがる、掌がすげえ痛え!

「くっ!? 何だこりゃ、まるで魔法みたいに…!」

「いえ、…本当に、魔法なんです。」

俺の知る限りではこんなこと、ELSでも出来ねえ。

「これがこの世界の現実なんですマイスター。この世界では魔法を科学的に使用しているというのが一般的なんです。」

「何だ、どこから声が？」

「マイスターのズボンのベルトに付いています。」

見ると、確かにズボンのベルトにサバーニャの2つのホルスタービ
ットを合わせてキーホルダーにしたものが付いていた。見る限り、
ライフルビットも入っているようだ。

声は、アニューとそっくりだ。

「いつの間に…。」

「マイスター、私は貴方と共に戦ってきたガンダムサバーニャです。
」

「は？何を言って、だはっ！！」

驚きのあまり、手を離してしまい左フックを腹に喰らってしまった。
幸い腹筋を鍛えていたのと後ろに少し下がったことでダメージはそ
んなにない。

それよりもガンダムサバーニャって、あれだけの大きさのものがこ
んな小さな端末になったってのか！？

「GNドライブでしたら内蔵されていますのでご安心下さい。」

「いや、そういう…問題じゃなくてだな…。」

あまりに色々不可思議なことがあって内心頭を抱えてしまう。

「私を嘗めてるんですか？ デバイスを持っているのに使わない、しかも会話してるなんて！」

サバーニヤと会話しながら攻撃を捌いていたのが気に入らなかったのか苛立たしげに連撃を放ってくる。

それを俺はぎりぎり左手と左足で捌くが、いい加減左手が動かなくなってきた。

多分、あの激戦からすぐここに跳ばされてきたから疲労も相当に溜まっているのだろう。

アインハルトは埒が明かないと思ったのか、一旦距離を取った。

「ぐっ、別に嘗めてねえさ。色々慣れてないことばかりで……うっ……」

いきなり力が抜け、膝を着いてしまう。

「マイスター！？ しっかりし……。」

そして疲労がピークに達したのか、サバーニヤの声を聞き終わらないうちに俺は意識を失った。

ヴィヴィオside

くライルがまだ跳ばされてない頃く

下校時間になって帰ってきたら、フェイトママとニールパパが帰ってきてました。

「おっ、帰ってきたかヴィヴィオ。おかえり！」

「おかえりヴィヴィオ。」

フェイトママはおやつのカップケーキを作っていて、ニールパパは焼きあがったカップケーキにトッピングをしています。

ママとパパどちらも料理が上手いです。

「ただいま。バルディッシュとケルデイルもただいま。」

「Hello lady.」

「おかえりなさい、ヴィヴィオ。」

テーブルの上に乗っているバルディッシュとケルデイルはいつも私の挨拶に返事してくれます。

ママ二人とパパが揃うのは滅多に無いのですごく嬉しいです。

ママは気分転換を兼ねてレイジングハートと一緒に夕食の買い物に出かけたそうです。

「ヴィヴィオ、出来たぞ。」

どうやらおやつが出来たみたいなのでテーブルに座って三人で手を合わせていただきますをして食べます。

「!？」

と食べていたらニールパパの目が金色に光りだしました。

ニールパパはイノベイターという…よく分からないけど凄いのになりました。

「ニール、どうしたの？」

パパ自身もあまり分からないらしいです。でもあまり気にしてないのがパパらしいです。

「いや、何か感じたんだが…どうやら気のせいのようなだな。大丈夫だ。」

パパは心配させまいと笑顔で何も無いことをアピールする。

こういう時のパパは心配させたくないか、本当に分からないかでこういう作ったような笑顔をします。

でも今回は本当に分からないみたい。

という訳で残りのカップケーキを食べちゃいます！

「ごちそうさまー！」

夜になり、フェイトを加えた4人で夕食を食べた後、ヴィヴィオがいつもの魔法の練習をしに出かけようとしていたのをなのはが止めた。

「ヴィヴィオはもう4年生だね。魔法の基礎も出来てきたし、そろそろ自分のデバイスを持ってもいいんじゃないかなって。」

するとフェイトが隣にある自分の家から帰ってきて、持っていた掌より大きいくらいの白い箱をヴィヴィオに渡した。ここに来る前にマリエル女史から受け取ったそうだった。

「いつの間に…。」

俺はそうつぶやいたが、別段気にせずに見ていることにした。

ヴィヴィオが箱を開けると中にはウサギのぬいぐるみが入っていた。

「そのウサギは外装か。」

「そうだよ。中の本体は普通のクリスタルタイプね。」

俺の質問にフェイトが答える。

とヴィヴィオが俺たちを見ているうちにウサギが箱をよじ登って浮遊する。

「と、と、飛んだよ、動いてるよ!？」

ヴィヴィオはビックリしてなのはとフェイトの間に入ってしまった。マリエル女史が付けたおまけ機能だとフェイトが言っていた。

「色々とりサーチもしてヴィヴィオのデータに合わせた最新式ではあるんだけど、中身はまっさらな状態なんだ。」

「名前もまだ付けてないから付けてあげてって。」

なのはとフェイトでデバイスの説明をしていく。

ああ、随分年月経ったなあ。俺なんかもう31歳だ。

「えへへ、実は名前も愛称ももう決まっていたりして。あつ、そうだママ!リサーチしてくれたってことはアレ出来る!?アレ!！」

「もちろん出来るよ。」

ヴィヴィオが言っているアレとは…ああ、なるほどアレか。フェイトだけは分かってないみたいだが。

「マスターも意地が悪いですよ。」

ケルデイムの念話を無視してヴィヴィオの方に目を向ける。

庭に出たヴィヴィオの足元から七色に輝くベルカ式魔法陣が現れる。

「————マスター認証、ヴィヴィオ・D・高町^{ディランディ}」

術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド

私の愛機^{デバイス}に個体名称を登録

マスコットネーム
愛称は『クリス』

正式名称『セイクリッドハート』」

なのははその名前が余程嬉しかったのか、顔を赤くする。

フェイトも多分俺もまっすぐなヴィヴィオの気持ちを感じて笑顔になる。

「セイクリッドハート、セーットアープ！！」

ヴィヴィオの周りを七色の光が球となって覆い、その光が止むとそこには：

18〜20ぐらいの姿、それもゆりかごで俺となのはと対峙した時になった格好の一部をなのはと同じ白に変えた、いわゆる「大人モード」になったヴィヴィオがいた。

「ん…！やったあー！ママありがとー！」

「あー上手くいったねー。」

「Excellent.」

ヴィヴィオとなのはとレイジングハートが喜ぶ中、フェイトだけは驚愕の表情をしてへなへなと尻餅を着いてしまった。

「…あ。」

「なのは、お前フェイトに教えてなかっただろ。」

「マスターは最初から気付いてました。」

「なのは、ヴィヴィオが…ヴィヴィオがああー！！何で聖王モードに！？」

大人モードの事を知らなかったフェイトは心配症もあいまって混乱しました。

予想以上だな…って！

「あ、おいケルディム、余計な事を言うな！」

「いや、あの、落ち着いてフェイトちゃん、これはね？」

「ちょ…なのはママ、何でフェイトママに説明してないのー！？」

「いやその…うっかり。」

「うっかりってー！それとパパもフェイトママに意地悪するならもう口聞いてあげないもん！」

「わ、悪かったからそれだけは止めてくれー！！」

いくらガンダムマイスターであっても自分の娘には弱い…というのが今日よく解った。

その後は、ヴィヴィオはなのとは一緒に外へ出かけていった。

フェイトもリビングでさっきのヴィヴィオの大人モードについてエリオとキャロに定時連絡で聞いていた。

俺はというと皆から罰としてまだ片付いてない食器をキッチンで洗っていた。

洗いものをしている間、俺はおやつを食べていた時に伝わった言葉を思い出していた。

僅かに聞こえてきた『天上人が来る』という言葉。

それは俺の知る限りでは…ソレスタルビーイングしかない。

誰だか知らないが、刹那たちが来るということを言いたかったのだろうか？

完全な憶測でしかないから今は保留に…。

「二ール、ちょっと来て。」

しようとしたらフェイトが呼んできた。

黙ってフェイトの近くまで来たら、エリオが神妙な顔つきで俺を見ていた。

「実は二ールさんに会いたいという人がいるんです。」

そうしてエリオが横に退いて、その人物が画面に現れた。

その人物は…

「生きてて良かったよ、ロックオン。」

ヘアスタイルが変わったが見間違えようがない。

「…ア、アレルヤだったのか!？」

金と銀のオッドアイをしたキュリオスのガンダムマイスター

アレルヤ・ハプティズムだった。

t o b e c o n t i n u e . . .

第1話 覇王と成層圏を狙い撃つ男（後書き）

ギンガ side

今日、連続傷害事件がまた発生した。

被害者は主に格闘系の実力者ばかり。犯人はそういう人に街頭試合を申し込んで相手を倒している。

その犯人は自称覇王『イングヴァルド』

古代ベルカ、聖王戦争時代の王様の名前。

でも今回の被害者は格闘系の実力者じゃない。

なんと、ニールさんと瓜二つの顔をした男の人。

それも次元漂流者の可能性があるのだ。

もしかしたら、ニールさんの弟さんかもしれない。

けれどその男の人はまだ目を覚ましてない。

いずれにしろまだ確証もないからニールさんに話すことは出来ない。

私は、何となく大きな事が始まろうとしている、そんな感じがした。

.

第2話 超兵と兄弟の再会（前書き）

ライル side

俺がアインハルトに襲われて気絶して、目が覚めたら何故か病室にいた。

「あっ、気が付きましたか？」

女の声がした方向を向くと、青い長髪で何所か組織らしき制服を着た18〜20歳ぐらいの女が丸イスに座っていた。

「ああ、あんたが俺をここまで運んでくれたのか？」

「いいえ。発見したのは民間人の方です。私はあなたに質問があつて来ました。それと、申し遅れてしまいました。私の名前はギンガ・ナカジマといいます。」

「なら、名乗らねえとな。俺の名前はロックオン・ストラトスだ。よろしくな、美人さん。」

「や、やだ、美人なんて…ってそうじゃなくて！」

結構生真面目だな。

「いや、何ていうか、ついからかいたくなっちゃって。」

「はあ…そういうところはニールさんと似ているんですね…。」

…おい、今この女はなんて言った？

自分でも分かるくらい目つきが厳しくなっていく。

「…今、ニールって言わなかったか？その名前を何処で聞いた？」

「き、聞いたも何も、会ったことがあります。むしろ一緒に仕事をしたこともありますよ。」

それを聞いた俺はギンガの両肩をがっしりと掴む。

「頼む、その人は俺の兄さんかもしれないんだ!!」

俺は、必死だった。この世界に、ただ一人の家族が生きているかもしれないのだから。

第2話 超兵と兄弟の再会

―アレルヤside

それは、僕がこのミッドチルダでエリオとキャロに拾われる前のことだった。

ソレスタルビーイングのラストミッションとしてずっとハレルヤ、マリー、ソーマと一緒にハルートで戦場を駆け抜けていた僕。

たくさんのELSを撃墜しながら飲み込まれそうになった人を助けながら、戦い続けた。

ハレルヤは人助けは偽善だと言ったけど、それでも僕は善だとはつきり言い放つ。

甘いと思われようとも、矛盾を抱えようとも、僕は戦いの中で人を助けることは止めなかった。

それでも、どんなに高い機動力を誇っていても遂に右腕しか無くなってハルート本体がELSに捕まり、侵食されてしまう。

先に出なければならぬので、迷わず僕は脱出しマリーが出てくるのを待つ。

「マリー！」

彼女の手を掴んで離れた瞬間に流れ弾がハルトに直撃し、大破してしまう。

その時に長く僕たちと共に有り続けた太陽炉も機体と共に爆発してしまった。

当然、爆風からマリーを守るため、自らを盾にした。

けれど、突然ELSたちが集まり、いつかトレミーや中東で見た黄色の花と同じ形となった。

刹那が対話を成功させた事はすぐに分かった。

「アレルヤ、綺麗だね。」

「そうだね。」

>…レルヤ、マリーさん、応答して！<

「フェルト、トレミーの皆は無事！？」

>うん、トレミー自体はもう駄目だけど皆生きてるよ。そっちは…ハルトが大破しちゃったんだね。<

機体を壊してしまったから何だか申し訳ない気持ちになる。

「ごめん。…刹那は？」

>刹那は、ティエリアが旅に出たって言ってたよ。まだELSとの対話が終わってないから母星へ行っちゃって…。刹那が戻って来るの

は約50年後だって…ちよつと、寂しいけど仕方ないよね。＜

フェルトの声色が少し涙声になっていることから凄く寂しいというのが伝わってくる。

＞ったく、罪作りの野郎だぜ。＜

ハレルヤが脳内でぼやく。正直、僕もそう思っているところもあるから否定しない。

でも、この異種との対話はイオリア・シュヘンベルグし計画して備えたこと、そして…今後の人類にとって必要なこと。

そして、今その対話を任せられるのは刹那しかない。

＞あ、それとさっきロックオンに…！？そんな、サバーニヤの反応が…消えた？＜

「ロックオンは！？」

「どうしたのアレルヤ？」

さっきまで黙って僕とフェルトの会話を聞いていたマリーがただでさえ近い距離を更に詰めて密着してきた。

＞ロックオンの生体反応も…ありません。＜

「そんな…。」

「…ロックオンがないの？」

事態が飲み込めたマリーから悲哀の声が聞こえる。

「うん、さっきまで確かにいたのに…。<

「僕も探しに行きたいけど、機体もない状態だし…。」

「ア、アレルヤ…！」

マリーが僕の後ろを凝視していたので見てみたら、大きなブラックホールのようなものが僕たちを飲み込もうとしていた。

「マリー、君だけでも…！」

「駄目、間に合わない！」

「うそ、アレルヤ、マリーさん！アレルヤ、マリー…プツン…。<

成す術なく、僕とマリーはブラックホールに飲み込まれていった…。

ブラックホールに飲み込まれた僕とマリー。

飲み込まれる中でマリーも僕も気絶し、気が付いたらどこかのコテージに備え付けられたベッドの上で眠っていた。

「ここは…一体…そうだ、マリーは！？」

辺りを見渡したが、隣のベッドにもどこにもマリーの姿はなかった。

外にいるかもしれないと思いベッドを出ようとしたら、コテージの入り口にあたる茶色のドアが開き、14歳ぐらいの赤い髪の少年が入ってくる。

「あ、ダメですよ！まだ傷が治ってないんですから。」

起き上がろうとしたところを制止されるが、その前に全身の痛みでまた寝てしまう。

「ぐっ、うつ…き、君は一体…。」

「僕の名前はエリオ・モンディアルです。貴方がアレルヤ・ハプテイズムさんですよね？」

僕は名乗った覚えが無いのでハレルヤに聞いてみた。ところが…

>俺は名乗ってねえ。俺もさっきまで寝てたからな。<

ハレルヤも言っていないのにどうやって知ったのだろう？

「ならエリオ、何で君は僕の名前を知っているんだい？」

「ああ、それはですね…俺がいるからだ。」

エリオの雰囲気我突然変わり、獰猛な笑みを浮かべるようになった。いや、違いはそれだけでなく、右目に金色の瞳、そして脳量子波が感じられる。

しかもこの感じは：

「馬鹿な、確かにハレルヤは僕の中に：くっ：てめえ、何もんだ！」
僕はいきなりハレルヤに無理矢理変わり、エリオを睨む。

でもハレルヤ自身も動揺しているようだ。

「決まってるだろ、俺もハレルヤだ！」

嘘だと言いたいところだけど、この脳量子波は紛れも無いハレルヤのものだ。

「言っておくが、偽もんじゃねえぜ。俺はイノベイターの戦いでリボonzの野郎にやられてこのエリオの中に入ったんだからな。」

「へっ！じゃあ言わせてもらうが、俺はそこから先の未来にいた。
要はてめえより強いって訳だ！！！」

確かに過去の自分より強くなった自負はある。

「はっ、解ってねえなあ。確かにあっちの世界ならてめえが強えが、
ここは魔法が主流の世界だ。それだったら、ここなら俺の方が強い
に決まってるだろうが！！！」

ブチッ

まずい、ハレルヤが怒った。

＜駄目だハレルヤ！＜

「ああ、喧嘩売ってんのかてめえ！」

完全にキレてる…せめてマリーがいてくれれば…。

「上等だ、ぶっ殺して…」

ん、ドアが少し開いた？

そして何かがふよふよと浮きながら僕たちの前に移動してきた。

そして…

「止めなさい!!」

大声で喧嘩を仲裁してきた。

ってこの声は、マリー!？

慌ててハレルヤに退いてもらい、僕の意識が完全に表に出る。

「マ、マリー…なのか？」

慌ててマリーの姿を見た僕は啞然としてしまった。

何と、マリーがまるで御伽噺に出てくるような妖精ぐらいの大きさ、そしてパイロットスーツではなく見慣れない服、それもタイトスカートの制服のようなものを着ている。

「そうよ。でも、あの、その…この服、やっぱり恥ずかしい。」

腕で体を隠して恥らうマリーを見て、僕はちよつと襲いたくなる衝動を抑えて状況把握を優先した。

ハレルヤが「押し倒せ」と五月蠅いので「ちよつと黙ってて」と言っておいた。

でもマリー、そんなこと言われると我慢出来なくなる。

「で、でもマリーは何で小さくなったんだい？」

どうにか欲を抑えながら、恥ずかしそうにしているマリーに聞いてみる。

「それは私にも分からないの。気が付いたら、こうなっていて…。」

「そうなんだ…。でも、どんな姿になっても僕のマリーへの思いは変わらない。」

そこにエリオが左ポケットから何かを取り出す。

「あの、ちよつといいですか？」

「それは？」

取り出したものは、オレンジのブレスレット。それもアリオスを思わせる装飾が施されている。

「これはアリオスガンダムです。」

アリオスと言われても僕にはよく分からず首を傾げる。

「こんにちは、マイスターアレルヤ。」

「ま、まさか、今喋ったのって…そのブレスレット!？」

「ブレスレットではなくアリオスです。」

これがあのアリオス!？

「でもエリオ、あなたが私に初めて魔法とデバイスのことを説明した時にアリオスのことなんて言わなかったわよね？」

マリーがエリオに質問するが聞き慣れない単語が出てきた。魔法？デバイス??

「はい。でもその前にアレルヤさんに魔法のことを説明していいですか？」

「そうね。でも説明は私がするわ。」

そう言ってマリーが突然光って、元の大きさに戻った。

「ふう、じゃあよく聞いてね。……………」

そうして数分間この世界のことを含めた魔法についてマリーの説明を聞く。

一通り説明を聞いた僕は、目を瞑って情報を整理する。

＞俺も聞いていたがよお、時空管理局ってのは人革さんと変わんねえよなあ。＜

クローン、戦闘機人、そしてロストログア。

他にもあるが、その管理局が抱える問題、歪みは僕たちがいた世界にもあったものだ。

特にクローン、戦闘機人、それにJS事件は僕にとっても他人事ではない話だ。

でもこれだけの技術と文化と国際…いやこういう場合は世界を繋ぐパイプと言うべきか、それらがあるにも関わらずインフラ整備が組織内に未だ行き渡ってないのはどうだろうか。

＞へっ、それはそれで胸糞悪い話だがよ、それ以上に魔法つつうのは面白そうだぜ！なあアレルヤ！！＜

＞それは使えた方がいいけど、僕にも適性はあるのかな？＜

いくら時空管理局が腐っているとはいえ、魔法は今まで知らなかった上に、まだ帰れる手段が無いとは言い切れない。

「マイスターにリンカーコアが無ければ私は造られていません。それより、マイスターに聞いて欲しいことがあります。この世界には既に一人ガンダムマイスターが来ています。」

「それは誰だい？」

「くつくくつ、聞いたら驚くぜ。」

エリオの中にいるハレルヤが意味深に笑った為に余計に気になってしまう。

「それはロックオン・ストラトス、それも初代の、デユナメスのマスターです。」

それを聞いた僕はつい啞然としてしまった。

生きていた、ロックオン、それもニール・ディランディが？

「ロックオン、だって？」

そんな僕の表情を愉快そうにエリオ（ハレルヤ）が笑う。

「はははははははははははは！　そうだ、しかも野郎は既に結婚してて娘もいるんだぜ！？」

「け、結婚！？」

もう開いた口が塞がらない。

「確か、ライルさんの兄で6年前に亡くなったのよね？」

僕はロックオンのことをマリーにそう教えている。アリー・アル・サーシェスと戦って死んだこともその男と僕とマリーがぶつかる可

能性もその時あったから話した。

「う、うん、そうだね。でも、生きていたんだ、よかった…。：エリオ、ロックオンと連絡取れないかな？」

そうして僕はこうしてロックオンと今6年越しの再会を果たした。

二ーl s i d e

いきなりアレルヤが出てきたのは驚いたが、すぐに嬉しさと顔が綻んだ。

が、すぐにアレルヤが真剣に話を始めたので俺も聞くに徹する。

「…そうだったのか。」

一通り聞いた、アレルヤがこの世界に来るまでのいきさつ。

イオリアの爺さんが立てた計画の目的、来るべき対話、外宇宙への進出、その為にアレルヤもまた未来を切り開く為に戦った。

だが、何故か誰と、いや何と対話をしたのか、誰も聞かず、そして声に出して聞くことが出来なかった。

…もしかして、何かこれから起こることに関係があるのだろうか？

それに未来の話を聞いたのに次元震を感知してない。

考えすぎかもしれねえな。

「でも、本当に良かった…。ロックオンが生きていてくれて。」

今は仲間との再会を喜びあうとするか！

「俺もまさかアレルヤに会えるとは思ってもみなかったぞ。にしても、お前の横で飛んでいるのはお前のパートナーか？」

「うん、紹介するね。彼女はマリィ、僕と同じ超兵で…僕の彼女なんだ。」

おお、大胆にも言い切ったなアレルヤ！

「初めまして、マリィ・パーファシーです。以前は、あの、人革連にいました。」

つまりはジンクスに乗っていた、ということか。

「よろしくな、マリィさん。俺はロックオン・ストラトス…だったが、ここでは本名で名乗っているから二ールでいいぜ。アレルヤもそうしてくれ。」

ライルがガンダムマイスターになっているならこう言っておけば呼び方を気にしなくて済むだろう。

それにライルがロックオン・ストラトスの名前を受け継いでいるならその方がいいし、何よりアイツがこの世界に來ている確信がある。

所謂双子の勘って奴だ。

「分かった。僕はここに来る以前の怪我が完治してないから、しばらくマリーやエリオたちとここにいろよ。」

「ああ、慌てる必要もねえからしつかり怪我を治せよ!!」

「うん、またね。もういいよ、エリオ。」

その後はフェイトとエリオとでしばらく親子の会話が30分ぐらい続いた。

翌日

今日は仕事休みということもあってなのはとのんびりしようとしていた。

だが、その矢先に地上108部隊のギンガから連絡が入った。

内容は『俺の双子の弟、ライル・ディランディが路上で倒れていたのを偶然通りかかった民間人が発見、負傷しているため現在聖王病院で治療中。』というものだった。

既に持っていたID、それもソレスタルビーイングのもので確認済み。むしろ意識を取り戻し、俺を呼んだらしい。

そうしていてもたってもいられなくなった俺は、なのはをフェイトとヴィヴィオに任せて、急いで車を走らせてライルが保護されている聖王病院へ向かい、今病室に到着した。

そして部屋の奥に、俺の弟で生き残った唯一のディランディ家の家族がいた。

「…ライル。」

「来たか、兄さん。」

ライルは、読んでいた雑誌を横に置き、こっちを向く。

その表情は、一見穏やかだ。

「こうして話すのは、あのテロ以来だな。」

そうK P S Aのテロ、あそこからだ。

あそこで…家族がバラバラになった。

「ああ、父さんと母さん、エイミイの葬式で別れてからだから14年か。」

そんなに経っていたのか、本当に…長え。

「兄さんの経歴をハロを通してみせてもらった。あの後にソレスタルビーイングに入るまで、ずっとスナイパーをやっていたんだな。」

ライルの表情も声も途端に悲しみを帯びる。

こうして聞くと、思い知る。

どんな理由であろうと、自分の勝手にライルに悲しい思いをさせてしまった。

「兄さんのことだから汚れ役は一人でいいと思ったんだろ？」

俺はその問いに無言で頷く。

罪悪感で言葉に出来なかった。

「勝手に決めて、守ったつもりで！」

ライルはベッドから出て右手で俺の胸倉を掴む。

「死んだと刹那から知らされた時は、もう帰る家もない、本当に孤独なのは俺の方じゃないのかと思った！」

ライルの瞳には怒りと悲しみが映っていた。

「すまない、ライ…ぐっ！」

つい謝罪を口にしてしまい、包帯に包まれた左拳で顔を殴られた。

痛え、今まで受けた誰のパンチよりも痛い。口の中を切ったのか、血の味がする。

「何故俺を呼ばなかったんだ、どうして……生きているうちに会わなかったんだ！」

今にも泣き出しそうな目で罵倒しながら俺を見る。

秘匿義務は理由にならない。ただ、ライルを巻き込みたくなかった。

「本当に、すまなかった……！」

その後はライルが落ち着くまで、ただ謝っていた。

しばらく経ち、ライルが落ち着いたところで今の俺の状況を説明した。

当然、ライルは驚いていた。

「まさか、兄さんが結婚して、しかも子供もいるなんて思わなかったな。兄さんのことだから、そういうことより世界の変革を取ると思っていたぜ。」

それは自分でも思ったことだ。だが、状況があまりにも違いすぎてあっちと同じやり方は出来なかったし、まさかサーシエスがこの世界に來ているとも思わなかったから、ラーナは遅すぎたけどなのはと向き合うことが出来た。

「結局、世界と向き合う前に自分自身を変革するのが先だからな。」

「ははっ、兄さんらしいや。それとその言葉は刹那も同じ……ことを……？」

突然顎に手を当てるライル。

「どうした、ライル？」

「おいおい、そこでそんなこと言うなよサバーニャ！」

…暫く見張ってるか。

「だああ、兄さんもそんな目で見るな！」

ヴィヴィオside

今日、突然ギンガさんから連絡があつてからニールパパが慌てて出掛けていった。

何でもパパの弟のライルさんという人が聖王病院にいるということらしい。

パパが慌ててということとは、余程大事な人なんだと思う。

でもそうだったら、そのライルさんは叔父さんということになるのかな？

「ヴィヴィオ、さっき連絡があつて、ライルさんをしばらくこの家にいてもらうことになったんだって。今こっちに向かつてるから、ご飯用意するの手伝って。あとなのはは大人しくしてること！」

「は…い…。」

なのはママはフェイトママに動こうとしたのを注意されて、リビン

グのソファで大人しく座っている。

私はフェイトママにそう言われて居間から台所へ駆けて行く。

どんな人なんだろう、楽しみだなあ!!

そうしていつもより遅い朝食の準備が始まったのでした。

To be continue...

第2話 超兵と兄弟の再会（後書き）

まず1ヶ月以上遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

見ての通り、今回はアレルヤの話なのですが、同時にライルとの再会も書かせていただきました。そのせいでヴィヴィオsideの尺を短くせざるを得なく…。

アレルヤはこの後にエリオ、キャロの手伝いをして、合宿で合流という形になります。

ライルは見ての通りですが、これからアインハルトとの絡みを多くしようと思います。

ティエリアと刹那はまだ先です。

次の話はライルとリオとコロナがなのはたちの家に来る話、原作のアインハルトVSノーヴェの話です。

なお、アンケートですが、デカルトのデバイスは圧倒的差でガデラーザに決定しました。当然の結果ではありますが、皆さんがデカルトをどう思っているのかがよく分かりました。ただし、設定に少し制限を付けようと思います。

でもう一つのアインハルトのイメージCVですが、伊藤 静さんと日笠 陽子さんが2票ずつで並んでしまいました。

なので、この二人のどちらかでもう一度アンケートを取りたいと思います。

締め切りは活動報告で。

次の更新は多分来年になると思います。

第3話 ライル叔父さんと親子の関係 (前書き)

本当はもっと年末に更新する予定だったのですが、ここまで時間が掛かってしまいました。

今回はライルとヴィヴィオが一喜一憂する話です。

あと、最後にチラッとあの人が出てきます。

※1月20日に加筆修正しました。

第3話 ライル叔父さんと親子の関係

ーヴィヴィオside

朝食を食べ終わったところで、玄関からインターホンが鳴りました。パパが帰ってきたと思ったけど、パパがインターホンを鳴らす事はありません。

だから多分、今日来ると言っていたリオとコロナかもしれません。

私はすぐに玄関へと向かい、ドアを開けました。

「はーい。」

ドアを開けたら予想通り、リオとコロナでした。

予想が当たってちょっと嬉しいです。

「おはよーヴィヴィオ、遊びに来たよ！」

「こんにちはヴィヴィオ。クリスもおはよう。」

クリスは私の横でふよふよと浮きながらお辞儀をして挨拶をする。

「いらっしやい、リオ、コロナ。さあ、あがって！」

「「お邪魔します。」」

二人とも靴を脱いで、横にあるスリッパを履きます。

リオは黒猫のスリッパ、コロナははやてさんからもらった狸のアツブリケが付いたスリッパです。

因みに、ニールパパは緑のシンプルなスリッパをよく履きます。

パパいわく、この歳になってそんな可愛いスリッパは履けないそうです。

ママが「男の人は可愛いよりかっこいいと言われる方が喜ばれる」と言っていたので多分そうなんだと思います。

「いらっしやい二人とも。でもごめんね、今パパはいないの。だから居間で待っていてくれる？」

「はい。」

ダイニングの椅子に座るなのはママが二人に伝えます。

「ヴィヴィオ、何だか今日は朝食が遅かったみたいだけど何かあったの？」

コロナがダイニングでまだ片付いてないお皿を見て聞いてきました。

そこでリオとコロナにパパの弟のライルさん：かもしれない人を迎えに行ったことを話してみます。

「もしかして来ちゃまずかった？」

リオが心配そうに私に尋ねてきます。

「ううん、大丈夫だよ。あとヴィヴィオ、パパがもうすぐ戻るって言ってたよ。」

私に変わってママがパパのことも交えて答えました。

うー、パパ早く来ないかな？

「ただいま！」

「あつ、来た！二人とも、行こう！！」

いてもたってもいられずつい、廊下を走ってしまいました。

危ないよヴィヴィオというフェイトママの声が聞こえましたが止まりませんでした。

そして玄関で見たのは…

「ヴィヴィオ、どっちがパパなの？」

「リオ、流石に分からないんじゃない？…ってヴィヴィオ？」

「すごい、パパとそっくり。」

服装が違うけど、顔がほとんど同じなパパたち（？）でした。

ライル side

すぐに退院手続きを済ませて、コンビニで兄さんと軽い朝食を食べ
てアレルやもこの世界に来ていることも聞きながら兄さんの家へと
向かった。そんなに離れてなかったようで約1時間で到着した。

因みに今着ているのはソレスタルビーイングの制服だ。

「ただいま!」

元気よく兄さんがドアを開けて入る。

「お邪魔します…っと。」

俺も入ってみると、ドタドタと9歳ぐらいの女の子3人が走ってき
た。

で俺と兄さんの顔を見るなり、相談し始めた。

「ヴィヴィオ、どっちがパパなの?」

「リオ、流石に分からないんじゃない?…ってヴィヴィオ?」

「すごい、パパとそっくり。」

と俺と兄さんを見て啞然とする。

どうやら真ん中のウェーブのかかった金に近い髪、赤と緑のオッド
アイの女の子が兄さんの養子のヴィヴィオのようだ。

「もしかして、君たちがヴィヴィオが言っていたリオちゃんとコロナちゃんか？」

「あっはい、初めまして。去年の学期末にヴィヴィオさんとお友達になりましたリオ・ヴェズリーです！」

慌てて挨拶するリオちゃんの印象は元気っ娘ってところか。

「初めまして、コロナ・ティミルといいます。1年生からヴィヴィオさんと仲良くしてます。」

お辞儀をしながら挨拶するコロナちゃんは気取らないお嬢様といったところだな。

「二人とも、いつもヴィヴィオと遊んでくれてありがとう。自己紹介が遅れちゃったな。俺の名前はニール・ディランデイ、でこっちが双子の弟のライルだ。」

兄さんから振られたため、しゃがんで右手を出す。

「三人とも初めまして。俺の名前はライル・ディランデイ、またの名をロックオン・ストラトス。どっちでも好きに呼んでいいぜ！」

ヴィヴィオちゃんが差し出した俺の手を握って…

「初めまして、ヴィヴィオ・D・高町です。ディランデイよろしくお願いします、

“ ライル叔父さん ” ！ 」

一瞬、石化したように体が硬直した。

「ぶふっ！」

念話でサバーニヤが吹いたのが聞こえた。

＞おいサバーニヤ、今笑っただろ！＜

「いえいえ、マイスターは既に三十路ですから…ぷくくっ！」

＞サバーニヤ、後で覚えてろよ…！＜

「どうしたんですか、ライル叔父さん。」

ヴィヴィオの言葉で念話を解除する。

…俺、まだ若いつもりだったんだがな…。

厳しい現実を突きつけられた気分だ。

表情には出さないように努めるが隠し通せているか怪しいところだ。

「あ、ああ何でもない。それでヴィヴィオちゃん、出来ればライルさんの方がいいんだがいいか？」

「じゃあ、ロックオン叔父さん？」

可愛く首を傾げてロックオン叔父さんという剣を俺の心臓に突き立てるヴィヴィオちゃん。

「いや、叔父さんの方を抜いてくれるのが嬉しいんだが…うつ！」

「駄目なの…？」

悲しそう…というか本当に悲しいからか、泣きながら俺を見るヴィヴィオちゃん。

一気に強い罪悪感が全身の温度を下げていく。

心なしか、リオちゃんとコロナちゃんの仇を見るように睨んでくる。

「何ヴィヴィオを泣かせてるんだ、ライル。」

そして、俺の後ろとヴィヴィオちゃんたちの後ろから威圧感を感じる。

俺の後ろは勿論兄さんだが、ヴィヴィオちゃんたちの後ろには亜麻色の髪でお腹の膨らんだ女性がニコニコと…しかし、明らかに怒っているという雰囲気を出していた。

何も言わずにこっちを見ているのが余計に怖い。

「あわわわわ…。」

更にその後ろでは金髪の美女がわたわたと慌てている。

彼女に助け船は…期待出来そうにない。

正に、四面楚歌だ。

「分かった、叔父さんだろうと何だろうと好きに呼んでくれ…。」

結局、こっちが折れることで皆の機嫌が直り、無事に家の中に入れた。

重圧から開放されて、つい安堵してしまう。

…だが踏んだり蹴ったりで、この先が凄く不安になってきた。

「えっと…本当はああいったことはそんなにないから気にしないで下さい。」

と隣を歩く金髪の美女が俺に優しく話し掛けてきた。

「俺、そんなに顔に出てたか？」

「はい。あと私の名前は、フェイト・T・ハラウオンです。皆からフェイトと呼ばれているのでそう呼んでください。」

優しい笑顔と端正な顔立ちのフェイトのお蔭で憂鬱な気持ちが吹き飛んだ。

「なら改めて、俺の名前はライル・ディランディ。よろしく頼むぜ、美人さん。」

「へっ?…ええっ!？」

何も、そう悪いことばかりでもないな。

「…マイスターのスケベ。」

サバーニヤが失礼なことを言っていたが、敢えて無視した。

ヴィヴィオside

ライルさんは私がなのはママとニールパパと血が繋がっていないから叔父さんと呼ばれるのが嫌なのかなと思い、つい泣きそうになってしまいました。

初対面なのに、叔父さんになる人を困らせちゃ駄目だよね…。

そうして心の中でライル叔父さんに対する態度を謝罪しながら、リオとコロナの間に居間のソファアに座る。

あれ、なのはママはまだ自己紹介してないよね？

「しかし、こうして見るとニールもライルさんもそっくりですね。」

フェイトママが微笑ましく言うとなールパパは面白そうにしているのに対し、ライル叔父さんは顔が苦笑いしています。

「でも、雰囲気もそうだけど匂いとか性格とか。」

なのはママがそう言ったら、ライル叔父さんの表情が明るくなった！

ライル叔父さんはもしかして自分は自分だということを理解してほしいのかな？

「つとそういえばなのはのことを紹介してなかったな。」

ニールパパが今気が付いて言ってくれた。

もう、ママはすっかりさんなんだから…。

「自己紹介が遅れてごめんなさい。ニールの妻の高町　なのはです。ニールから話は聞いているよ。」

「そうか、アンタが兄さんの奥さんか。全く兄さんも隅に置けねえなあ！」

ライルさんが悪戯をする時の意地悪そうな顔になった。

たまにパパもなのはママをからかうんだよね。

「ははっ、いいだろう？」

「やだもう、ニールったら…ふふっ。」

でもパパが一枚上手でした。

ママはほっぺたに手を当てて恥ずかしそうに、でも嬉しそうに笑っています。

「うおっと、ご馳走様だ。」

ライル叔父さんはすぐにその話を終わらせました。

パパとママが結婚してから4年経っているのにラブラブだもんね。

「あっ！ヴィヴィオ、もう出掛けないとノーヴェさんたちに悪いよ？」

コロナが話し掛けて部屋にある置き時計を見ると既に出だす時間を過ぎていました。

「あっそっか、もう行かないと…。」

実はこれからミッド中央第4区の公民館でストライクアーツの練習です。

「ヴィヴィオ、それなんだが俺とライルも行っていないか？ライルに案内と買い物がてらお前らのストライクアーツの練習風景を見たいからな。」

「えっええ！？」

突然のことで私どころかコロナもリオも慌ててます。

「は、はひ、いいでしゅよ！しひゃかんひゃった…。」

リオが慌てすぎてカミカミの返事をしたけど、私もコロナも同意しました。

という訳で、パパとライル叔父さんと一緒に移動します。

ミッド中央第4区 公民館

ミッド中央市街地に着くと、ノーヴェだけでなくウエンデイもいました。

遅れてしまったため、早歩きで公民館に行き、今ノーヴェ、リオ、コロナと一緒に練習着に着替えています。

パパ、ライル叔父さん、ウエンデイはストライクアーツ練習場の隅で待っています。

「でもやっぱ意外〜！ヴィヴィオもコロナも文系のイメージだったんだけどなあ。」

そう言うリオとの出会いは無限書庫でした。

「文系だけどこっちも好きなの。」

「わたしは初心者^{エクササイズ}レベルだけだね。」

「ほんと〜？」

「あと読書はね〜」パパの趣味の読書に影響、でしょ？」コロナの
いじわる…。」

とか言って剥れている私ですが、最近話題にパパのことを加えてしまいうクセが付いているのに気付いて困っています。

パパのことは好きだけど、一度あまりその話ばかりしてしまい別のクラスメイトの人に注意されてしまったので気にしています。

「さ、行くぞ。」

ノーヴェに呼ばれて私達はストライクアーツ練習場へ向かいます。

ニールside

ヴィヴィオたちが着替えを終えてストライクアーツの練習をしている。

「へ————、なかなかいつちよまえっすねえ。」

「だろ？」

ウェンディの感想に嬉しそうに頷くノーヴェ。俺もライルも同じことを思っている。

ノーヴェがヴィヴィオやコロナに教えている。

本来なら俺やなのはが面倒を見るところだったが、どっちも教導で魔法を少し教える程度でそんなに面倒を見れてない。何よりストライクアーツとなればノーヴェの方が詳しい。その上ノーヴェは一番時間が作れることに加え、最初に自分からヴィヴィオに教えたこと

もあってヴィヴィオの信頼もあってなのは共々ノーヴェに頼んでいる。

「兄さん、ストライクアーツっていうのは格闘技なのは分かるが、この世界で一番有名なのか？」

「ああ。ストライクアーツは、ミッドチルダで最も競技人口の多い格闘技で、打撃による徒手格闘技術の総称だと言われている。…そういうや、ノーヴェに礼を言っただけだな、ありがとよ。」

とノーヴェの頭に手を乗せて撫でる。

「う、嬉しいけど、まだ子供扱いされてる…。」

ノーヴェの顔は茹蟄のように真っ赤。だけど、4年前ツンケンしていた頃に比べたら随分丸くなった。

「はは、兄さんはここでも人気ものだな。」

ノーヴェから手を離し、話しかけてきたライルに振り向く。

「そうっすよ、ニルちゃんは管理局員男性部門人気ランキング1位っすから。」

そういえば、1ヶ月前に雑誌で紹介すると記者の人にインタビューされたな。

っていうかニルちゃんは止めてくれ。

「おいおい、そうだとしたら顔隠さないと…って遅いようだぜ。」

ふとライルが向いている方向に目を向けると、ストライクアーツの練習をしに来た女子高生と思われる女の子数人が好奇と驚愕の目でこっちを見ている。

その中で一人の女の子がこっちに近付いてくる。

「あ、あの：ニール・ディランディさんですよ？」

この女の子から「サインが欲しい。」という願望、そして魔法のことがよく分からないという悩みが聞こえる。それはイノベイターになった後から時々起こるようになった現象だ。

「そうだ。先に言っておくが、俺はサインは書かねえ。」

俺は飽くまで人気取りじゃなくて、管理局を内側から変えていく手段とただ困っている人を自分の出来る限り助けるという目的で動いている。

断られてションボリとする女の子に少し申し訳ない気持ちになる。

「だがその代わり、一つ相談に乗ることなら出来る。」

「えっあっ、はい！それでしたら魔法のことを少し教えてほしいのですが：。」

「いいぜ。：悪いがライル、ウエンディ、ノーヴェ、ヴィヴィオたちを頼む。」

本当は練習が終わるまで見ていたかったが言った手前、仕方ない。

「…まったく人気があるつつうのも考えものだな。」

ライルの呟きに全くその通りだと返したかったが、その言葉は飲み込んで女の子に魔法を少し教えに歩いていった。

ライル side

娘とその友達が真剣に格闘技の練習をしているのに兄さんはどうとも知らない女子高生たちの方へ行ってしまった。

しかも大人顔負けで色々チャレンジ精神旺盛でマジで良いこと言っていたのに勿体ねえぞ。

ヴィヴィオは型の練習から組み手の練習をしていたがすぐ気付いたのか、眉の端が下がった。

「でも仕方ないっすよ、ニルちゃんは仕事は教導だし。」

兄さんがいなくなった為、ウェンディが隣に寄ってきた。

ノーヴェはコロナの嬢ちゃんと一緒に組み手をしている。

「違う違う、あれは兄さんの性分だよ。」

ガキの頃から兄さんは何でも出来た。それで周囲は不器用で冷めやすかった俺と比べては兄さんを褒めていた。

でも言い換えれば面倒ごとを押し付けられやすいという欠点があることに後々に気付かされた。

要は良い点には必ず裏になる欠点があるということだ。

「ふーん、ライちんってニルちんと長年離れていたのによく知っているんっスね!」

「自分でも不思議に思うよ。」

正直勘もあったのだが、兄さんが元々の性格が変わっていなかったのが雰囲気で解ったのが一番の理由だ。

因みにあだ名については本人が皆に付けていると聞いたので突っ込まないことにした。

「あっ、ノーヴェとヴィヴィオが組み手やるっスよ!」

気付けばギャラリーが集まっていて、リオとコロナも観戦しようとしていた。

で、当のノーヴェとヴィヴィオは…って、あれ!?

「ウ、ウェンディ、あのサイドポニーの女の子はまさか…ヴィヴィオなのか!?!」

明らかに成長している!?

「そうっス：ってああ、ライちゃんは初めてなんスよね？」

驚いたなんてもんじゃない。子供がいきなり大人になったら世の親御さんは間違いなくひっくり返る。

「二人の組み手は凄いつスよ？」

ウェンディがそう言うや否や、組み手が始まった。

「マイスター、お兄さんの為に録画します。」

>そんなことも出来るのか。じゃあ頼むぜ、サバーニャ。<

俺は左ポケットから小さなホルスタービットを取り出して手に乗せる。

ノーヴェがハイキック、右アッパーを繰り出すが、ヴィヴィオは右腕で防御、顔を引いて回避した。

お返しに右ストレートで突くもノーヴェは腕をクロスして防御する。

「へえ、様になっているなあ！」

観戦している三人が目を輝かせて見る中、俺も素直な感想を思わず溢した。

その観戦されている二人はハイキックとライダーキックとぶつけ合

い、先に体勢を立て直したノーヴェが着地したばかりのヴィヴィオに左ストレートをお見舞する。

ヴィヴィオは慌ててガードするも、左ストレートはフェイクでサマースholtで腕の防御を崩される。

そして左足でヴィヴィオの顔を捕らえたところで寸止め、組み手は終わった。

ギャラリーから歓声と拍手が沸き起こる中、俺も拍手をしていた。

すると組み手を終えたノーヴェとヴィヴィオがこっちに近付いてきた。

「ライル叔父さん、どうでした？」

ヴィヴィオは大人から子供に戻って、遠慮がちに見上げながら俺に感想を聞いてくる。

「そうだな、俺がお前らと同じ歳の頃に同じ動きをやれと言われたらまず無理だな。要はそんなくらいすごいってことだ！」

自分なりに素直に、しかし優しく言ったつもりだが大丈夫だろうか？それにあの表情も気になるしな。

「うー、やったー褒められたー！」

その心配も裏腹に大喜びのヴィヴィオ。

この子は本当にいい子だ。さっき叔父さんと言われたのが今では素

直に歓迎出来るぐらいだ。

だが、あの様子を見るとどうやら最近兄さんは忙しさと持ち前の性格であまりヴィヴィオのことを構ってあげられてないようだ。しかも奥さんは妊娠中であまり無理をさせられねえし、フェイトも忙しいらしい。

こりゃ俺が一肌脱いだ方が良さそうだな。

二ールside

あの女子高生に魔法を教えていたことで夕方になってしまった。来たときには既に4人とも着替えていて練習は終わってしまった。サーシエスを倒して以来、管理局の教導や試作デバイスの運用だけでなく色んな人に頼られている。

迷子探しから強盗事件の解決、救助活動、ボランティアなどソレスタルビーイングにいた頃では考えられなかったことを沢山やっている。

しかし、今回はそれが仇となってしまった。去年ゲンヤのおやつさんと飲みに行った時に「沢山の人の頼みを聞くのも良いが、足元見かぞくるのも忘れるなよ。」と警告されていたというのに…。

で今はノーヴェ、ウエンディと別れて帰り道を歩いている。

当然、その途中に話しかけようとしたがリオ、コロナと喋っていて上手く話しかけられない。

更にヴィヴィオはそっぽを向いてしまった。

…やっぱり今回のはずだったな。

思わず溜め息が漏れる。

「俺から言わせれば自業自得だぜ、兄さん。」

表情は微笑だが口調で怒っているのが解る。

「手厳しいが、その通りだな。あれじゃあ誤解されても…。」

俺がそう言った途端ライルは溜め息を吐いた。

「解ってねえな兄さんは。ヴィヴィオは兄さんに一番自分の姿を見て欲しかったんだよ。それに、娘の練習を見ているとか理由付けて断ればよかったんだよ。」

本当は解っていたが、出来ていなかった時点で解っていなかったのと同じだ。

「そうだな、今後無いようにする。」

「よし。サバーニャ、さっきの組み手のデータをケルディムに転送

してやってくれ。」

「録画してくれたのか、ありがとよ！」

「了解。……転送完了しました。」

「データ受信完了しました。ありがとうございますサバーニャ。」

これは夜寝る前にでも見ておこう。

ヴィヴィオside

リオとコロナと別れてパパとライル叔父さんの三人になって家に続く道路を歩いています。

クリスは私の頭に乗って座っています。

でも何故か私から話しかけられません。

「ヴィヴィオ。」

ふと話しかけられて後ろのパパに振り向きます。

「どうしたの、パパ。」

パパはしゃがんで頭を下げてきました。

「今日は、あまり見てやれなくてすまなかったな。」

どうしてああいうことをしたのかは解っています。

パパはママと同じ教導官だけど、沢山の人を犠牲にしたサーシエスという人を倒したことで皆に知られるようになりました。

だからさっきのようにお仕事以外でも色んな人から頼られることも多いのです。

でも…

ポカッ

「あたっ。」

パパの頭をグーで軽く叩きました。

「これと肩車で今は許してあげる。」

いたずらっぽくウインクしてパパの気持ちを和らげてあげます。

「はははっ、かしこまりましたお嬢様。」

オットーがよくやる「執事さんがやるようなお辞儀」をしてノってくれたパパ。

「それじゃ遠慮なく…えい！」

私はジャンプしてパパの肩と頭に乗る。

「おおっと！ヴィヴィオは本当に肩車が好きだな。」

「えへへ、私の特等席だもん。」

そのまま家に帰るまでずっと肩車をしてもらいました。

「これにて一件落着だな。頑張れよ、兄さん。」

ライル叔父さんもありがとう。

ノーヴェ side

ヴィヴィオたちとの今日の練習と用事も終わり、今帰宅の途中だ。

ヴィヴィオがニールさんの様子を見て少し不機嫌になったのは気になったが、それはニールさんが自分でどうにかするから大丈夫だろう。あの人はそういう人だ。

今日のことは気にするのを止めて明日はどんな練習をしようか…。

…上の街灯から人の気配がする。

「ストライクアーツ有段者、ノーヴェ・ナカジマさんとお見受けします。」

振り向きながら見上げるとそこには、薄い緑色の長髪であたしより身長が高い女がいた。

「貴方にいくつか伺いたいことと、確かめさせていただきたいことが。」

まさか、チンク姉とウェンディが言っていた『霸王』か？

ティエリア side

：何が起きたのだろうか？

刹那と共にELSとの対話の為に旅立ったはずなのに、何故か肉体もある上に制服を着ていた。

起き上がり周囲を見ると薄暗い森の中だった。そしてヴェーダにアクセスしてみたものの、何も起きない。つまりは信じられないことだが、地球とは違う星のようだ。

とにかくここにおいても埒が明かないため、今はそよ風の流れに沿って進んでいる。

せめて空が見えれば方角が早く分かり、色々と可能性を模索出来るのだが仕方ない。

もし長引くようなら野宿を想定しなくてはならない。刹那ならサバイバルに慣れているから対応が早かったかもしれないが僕はサバイバル自体経験したことがない。

と、思考しながら進むうちに前方の叢くさむらからガサガサ音が鳴った。

「誰だ？」

僕は身構え、何が来ても対処出来るようにする。しかしもし熊などであればいくら僕がイノベイドでも対処しようがない。

で、出てきたのは：

「虫…人間？」

僕は驚いて怪訝な目で見る。

だがよく見ると茸など山菜と思われる食材の入った籠を肩に背負っている。ということは住んでいる人がいるかもしれない。

「君、もし僕の言葉が解るなら頼みを聞いてくれ。この近くに住んでいる人がいるなら、その人がいる住居へ案内してほしい。」

すると通じたのか、付いて来いと言わんばかりに指を自分が出てきた方向を指差す。

僕は彼に礼を言って大人しく付いて行く。

——紫の革新者の導き手が彼らとは別の世界で戦友たちとの再会を待つ——

t o b e c o n t i n u e . . .

第3話 ライル叔父さんと親子の関係 (後書き)

最初はギャグ多めにしようかと思っていましたが、ニールとヴィヴィオの関係がただ純粹にいい関係で書いていいのか迷い、結果として今回の描写にすることにしました。

ティエリアのいる場所はVivid2巻を見ている人は既に気付いたかと思います。

次から合宿に入るまでティエリアの動きを最後に書いていく予定です。

今回はアインハルトVSノーヴェとライルとサバーニャによる魔法の練習です。

第4話 時と世代を超えた出逢い（前書き）

約3ヶ月ぶりの更新です…。お待たせして申し訳ありません!!

今まで色々有りすぎて集中出来なかった時期があったので遅れてしまいました。

その割りに長文なのに原作の内容を視点変えただけの内容がほとんどという内容に今回はなっていました。

更に今回載せるはずだったアレルやsideは長さの関係で次に持ち越しになりました。

ティエリアもアルピーノ家との出逢いだけに…。

ですが、ちょっと面白い話も入れたのでそれで勘弁して下さい。

あ、あれ、ライルさん、どうして拳をポキポキ鳴らして…ま、待って、悪かった！ネタに使って悪かったからその拳を収め…

「俺は、一途で、浮気なんざ、しねえんだよおおおおおおお!!」

グエツ、デフツ、ゴホツ、ブルアアアアアアアア!!

第4話 時と世代を超えた出逢い

―アインハルトside

私、アインハルト・ストラトスは公共の通路に設置されている街灯の上で今日の対戦相手となるノーヴェ・ナカジマさんを見下ろしている。

本当は学校の帰りで見かけて、先回りしただけだけど。…行く途中で街灯で足を滑らせて落ちかけたのは内緒で。

「貴方に伺いたいことと、確かめさせていただきたいことが。」

「質問すんならバイザー外して名を名乗れ。」

ノーヴェさんは試合をする相手として私を見ているのだろう、私に相応の礼儀を求めてきた。

今までの相手は礼儀より私を撃退することを優先していたため、このままで戦っていた。

唯一、昨日私にセ：セクハラをしたあの男が落ちてきた時にバイザーが外れてしまったが。

だが、今日の相手は今までの相手とは違う。

一番の目標は、アリー・アル・サーシエスを倒したことで有名にな

った英雄で時空管理局員のニール・ディランディ教導官。格闘家ではないけど現在最も有名で、最も強い魔導師。彼女：ノーヴェ・ナカジマを倒せれば彼に近付ける。

「失礼しました。」

その要求に答え、私もバイザーを外す。

「カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト。『覇王』を名乗らせて頂いています。」
アインハルト

「噂の通り魔か。」

街灯から飛び降り、ノーヴェさんと対峙する。

「否定はしません。」

それは目的のためには仕方ないこと。

「伺いたいことはあなたの知己である『王』達とここ数年で有名になった英雄についてです。聖王オリヴィエの複製体クローンと冥府の炎王イクスヴェリア、そして深緑の狙撃手ニール・ディランディ、貴方はその両方の所在を知っていると…。」

と二人の王の名を挙げた瞬間にノーヴェさんの様子が変わった。

「知らねえな。聖王のクローンだの冥王陛下だのなんて連中と知り合いになった覚えはねえ。」

私をまっすぐに映す瞳は「お前があの人を知っている、一緒にするな!」と訴えているように感じる。ニール・ディランディについては黙秘されたが今は置いておこう。まだ挑むには早い。

「あたしが知ってるのは、一生懸命生きているだけの子供達だ!」

この件は知っているが喋ってくれそうにない。

「:理解できました。その件については他を当たるとします。ではもう一つ、確かめたいことは:」

ノーヴェさんは解っていたのか、構える。

「一体どちらが強いか:です。」

そして持っていた荷物を放り投げ、牛が走る準備をする時のように地を蹴る。

「防護服と武装をお願いします。」

「要らねえよ。」

それは侮っているのか:いや、初撃でまず私を試すつもりなのか。

「そうですか。」

「よく見りゃまだガキじゃねーか、何でこんな事してる?」

バレた！？

私のように子供から大人の姿になる人がいなければ気付かないのに……。

でも動揺を見せないようにポーカークフェイスを保つ。

「強さを知りたいからです。」

ノーヴェさんは足に続いて腕を構える。

……どう来る？

人となりを見るに突撃をしてくる可能性があるが、まず出方を見るほうがいい。

「はっ、馬鹿馬鹿しい！」

地を蹴る音を感じて条件反射で左腕を出した瞬間、ノーヴェさんが迫り、飛び膝蹴りを繰り出してきた。

不意打ちだが、勝負をする以上そんなことは関係ない。

それで終わらず、右手に電気のように帯電した魔力を纏って私にぶつけてくる。

左腕では弾かれるとすぐ判断した私は、右腕で左腕を支える。

それでも受けた拳の威力は凄まじく、後ろのフェンス近くまで押さ

れてしまった。

若干左腕が痺れるがすぐに治まるだろう。

ノーヴェさんは凌ぎきられたことが予想外だったのか、悔しそうな表情で右ポケットから六角形のデバイスらしきものを出す。

「ジェットエッジ！」

「Start up」

光がノーヴェさんを包み、収まるとバリアジャケット姿となった。

つまりは本気で相手をしてくれるということだ。

「ありがとうございます。」

「強さを知りたいって本気かよ？」

「正気です。そして今よりもっと強くなりたい。」

「ならそんな事してねえで、真面目に練習するなりプロ格闘家目指すなりしろよ！単なる喧嘩馬鹿ならここで止めておけ。ジムなり道場なり紹介すっからよ。」

今度はこちらから行くことにした私は直立不動から構える。

「ご厚意痛み入ります。ですが、私が確かめたい強さは…生きる意

味は、表舞台には無いんです。」

先程不意打ちのお返しとして突撃^{チャージ}を行う。

右腕の脇を閉め、左腕を前に出す。足は膝を曲げ、いつでも突撃出来るように少し前に体重を掛ける。

相手が出方が解らずに思考して少しの隙を作った瞬間…

「って!!」

突進して右ストレートを顔面掛けて攻撃する。

しかし、ノーヴェさんは受け流すような形で顔を左に動かし、回避する。

いや、少し力を込める方向の違いもあったのか、予想より大きくズレ、後ろに回り込まれてしまった。

だけど、これで終わりではない。

私は体を腰の回転を使って反転、更に突撃の際に曲げた左足を伸ばし、足裏を地に付ける。

そこから生まれるエネルギーを利用して再度突撃する。

「ちっ…!」

相手は右ストレートを繰り出すも、力が籠もってないし、速度も大したこともない！

その攻撃を少し前かがみに体重を落とすことで避け、右フックを勢いを殺さずに相手の腹部にぶつける。

「がっ…！」

相手はすかさず後ろにジャンプして距離を取る。

「列強の王達を全て倒し、ベルカの天地に覇を成すこと。それが私の為すべき事です。」

ノーヴェさんは着地し呼吸を整えたところで私に向かって突撃していく。

「寝惚けたこと抜かしてんじゃねえよ！昔の王様なんざ皆死んでる！生き残りや末裔達だって皆普通に生きてんだ！！」

…そんなのは私にとって過去を忘れている、今更持ち出しても意味のないこと、そのように聞こえる。

私は突撃から続く連撃を捌く。

その中で拳と拳がぶつかり、互いに距離を置く。

「弱い王ならこの手でただ、屠るまで。」

人の幸せを踏み砕くことになっても成さねばならない、その一言を相手にぶつける。

「この…バカったれが!!」

私の言葉で堪忍袋の尾が切れたようだ。

彼女を中心に魔力の奔流があふれ出す。

「ベルカの戦乱も、聖王戦争も、ベルカって国そのものも、もうとつくに…終わってんだよ!!」

空中に魔力で構成された道を創る特殊な魔法が発動され、私に向かってくる。

それを迎撃しようとまた構えなおし…手足が動かないということは、バインド!?

「っ!!」

回避は出来ない、おそらく強い一撃が来る。

でも、その一撃を受けければ…大きな隙が出来る!

「リボルバー、スパイクツ!!」

強烈な蹴撃が私の顔に直撃する。

がその前に脆かった左手のバインドを碎き、蹴りの軌道をずらした。頬に直撃して口内を歯で切ってしまうが、お蔭でノックアウトを免れ、ノーヴェさんの足を左手で掴む。

「!？」

勢いを止めたところでチェーンバインドで拘束する。

「終わってないんです。私にとっては、まだ何も…。」

足先から練り上げた力を抜き手のままの右手に伝わせ、まるで剣のように振り下ろす。

これは今出来る『霸王流の技法』のうちの一つ、『断空』。

その技法を使った打ち下ろし。

はおうだんくうけん
霸王断空拳

「弱さは罪です。弱い拳では…誰のことも守れないから。」

声を上げることもなく崩れたノーヴェさんが気絶していることを確認して、私は荷物を置いたロッカーへと歩き出した。

ロッカーに着くと、先程のダメージが私の体を襲う。

彼女の一撃、凄い一撃だった…危なかった。

この体は間違いなく強いのに…私の心が弱いから…。

フラフラになりながらも、自分の荷物の入ったロッカーに到着する。

「武装形態、解除。」

成長した自分から、元の…まだ子供である自分へと戻る。

帰って少しだけ休もう。目が覚めたらまた…

「!？」

携帯端末を取り出したら突然痛みが走り、力が抜けて床に倒れ込む。

ダメ、こんなところで倒れたら…。

ダメージが思った以上に大きく、動けずに私の意識は途切れていった……。

二ーるside

翌日になり、スバルから昨夜に例の『霸王』と名乗る者がノーヴェを襲撃したという連絡が入った。

名前はアインハルト・ストラトス、ヴィヴィオが現在初等科で入っているサントヒルデ魔法学院の中等科1年生。

：ストラトスという苗字に一瞬反応したのは、皆には内緒だ。

今回の事件は当人同士で喧嘩両成敗という形で穏便に済ませたという事で特に問題はないそうだ。

アインハルトは今聖王病院で眠っている冥王イクスヴェリアと、聖王のクローンとは言っても末裔とも言える我が娘ヴィヴィオにも将来勝負を仕掛けるつもりでいたようだが、恨みで狙う訳ではなく純粹に強さを証明したかったため、身構える必要はない。

しかし問題はそこではなく、この事件の発端となったその娘の抱える覇王イングヴァルドの記憶だ。

記憶とは言っても一部で、全てではない。

覇王イングヴァルドは古代ベルカ諸王時代にて王族として生まれた。

薄緑の髪、薄紫とアカアマリンのオッドアイが特徴で、アインハルトも同じだというのは確認済み。

そんなイングヴァルドに関係あったのが聖王女と呼ばれるオリヴィエ、ヴィヴィオのオリジナルとなった人物だ。

「あれ、ニールが見ているのって、古代ベルカ乱世時代の王達っていう本だよな？」

ふと16畳分ある休憩室で読書に集中していた意識を声を掛けた人物に向ける。

声を掛けたのは今では同じ職場の同僚となったヴィータだ。

「ああ、ちょっと気になることがあって書斎から引っ張り出して来たんだ。」

書斎は二階にある俺となのはの寝室の隣で、ここに飛ばされて来てから集めた本がズラリと並んでいる。そして俺の家での仕事場でもある。

余談だが、昨夜にライルにその書斎で寝てもらった。しかし、本がいっぱいあるのが気になり寝られないと苦情を言われてしまったため、仕方なく隣のフェイトの家に寝てもらうことになった。

流石に一階のソファにするのは風邪をひくかもしれないためだ。

「大方、昨日ノーヴェとスバルが捕まえた自称覇王のことが気になったんだろ？」

「当たり前だ。誰かから聞いたのか？」

「なのはが、教えてくれた…。」

項^{うなだ}垂れ、甘すぎて胸焼けして吐きそうな表情をしながら答えるヴィータ。同じ職場で教官としては同じ年月のキャリアだが、なのは以外で一番相談出来る相手でもある。…同時に、なのはから惚気話含めて俺の話を聞いているようだ。

どうやら今回は惚気話も一緒に聞かされたようだ。

「すまないな。」

苦笑しながらヴィータに予め買っておいた甘くないストレートティーの缶を渡す。

「サンキュ：ゴクツ、ゴクツ：ふう、生き返る。」

一気飲みしたヴィータは後ろにあったゴミ箱に後ろを見ずに手首のスナップを効かせて投げる。

缶は見事にゴミ箱の：角に弾かれ、ヴィータの後頭部に当たる。

「いたっ！：うう、地味に痛い：。」

しゃがんで頭を抑えるヴィータがドジな女の子に見えて可笑しくなる。

「はははははははは、横着するからそうなるんだよ。」

まだ痛いだろう後頭部を右手で撫でながら注意する。

「う、うるせえな：。」

ヴィータはさっきのことが恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしてそっぽを向く。所謂ツンデレだ。

「どうせツンデレだっと思っていらっしゃるんlaro?」

口を尖らせて俺の思っていることを当てるヴィータだが、もうかれこれ7年の付き合いだから解ってもおかしくない。

「まあそう拗ねんなんて。：それより、覇王を名乗る女の子の目的も聞いているだろ？」

さっきまでの浮ついた気持ちを切り替えたヴィータは真剣な表情になる。

「勿論聞いているぞ。聖王や冥王をぶっ倒したいとか聞いたけど、要は自分は強いということを証明したいつつうことだろ？」

こういう洞察力や義理堅いところもあるから、俺もなのほも安心して相談出来る。

「そうだ。だが聞いた限りでは、純粹に強いことを証明出来れば良いようだし、十分に救いようがある。」

只事ではないが、その強さをスポーツとかに向けることが出来れば問題が大きくなることはないだろう。

「けどよ、ノーヴェたちがもう動いているらしいし、お前が心配することもあるんじゃないか？それにヴィヴィオに会えば気も変わるだろ。」

そう、おそらく今、ノーヴェたちが段取りを組んでアインハルトにヴィヴィオを会わせるということをやっている。

「ははっ、そうだが念のためにライルに様子を見に行かせた。」

まあ、保険という意味で行かせただけだから大丈夫だろう。

だが、俺の一言にヴィータは額を抑えて呆れる。

「…すっかり親馬鹿になってるじゃねえか、アホらし…。あたしは、先に職場に戻る。」

とことん呆れかえってしまったヴィータは疲れた顔をして休憩室を出る。

そんなヴィータに内心謝りながら、俺も本を閉じて新開発のデバイスの試験運用の仕事を始めるためにその場を後にする。

ライル side

仕事で忙しい兄さんに頼まれて、アインハルトという女の子とヴィオが出会うところを見届けに指定された場所であるカフェテラスに來ている。って言っても、ウェンディもいる辺り、どうにも護衛が三人だけでないようだから過保護な気がする。

俺がそこに着くと、ノーヴェと一緒に青いショートヘアの女の子とオレンジのロングヘアの女の子が座っていた。兄さんから聞いたスバルとティアナという兄さんの年下の同僚だ。

服装は、流石にソレスタルビーイングの制服は目立つため、私服にした。ライトグリーンのYシャツに黒いストーンウォッシュのダメージジーンズという出で立ちだ。

「二人とも、せっかくの休暇だろ？別にこっちに付き合わなくても…あっどうもライルさん。」

「よう、ノーヴェ。俺がここに来ている訳は兄さんから聞いているだろ？」

談笑していたノーヴェたちが俺に気付いて顔を向ける。ノーヴェ以外の二人は俺の顔を見て驚くが、今更だから放っておく。

「はい、確かに聞いてます。」

ノーヴェは同席に二人の反応を気にせずに挨拶する。

「で、同席している二人は俺と兄さんと顔が同じだから驚いてんだろ？」

俺の言葉に凶星を突かれたからか、戸惑う二人。

「えっ、えあっ…。」

「す、すいません…ライル…さん…。」

「ぷっくくっ…。」

挙動不審になっている二人。ノーヴェはそんな二人を見て横を向いて笑いを堪えている。

気付いた二人の顔は真っ赤だ。

「笑いすぎだノーヴェ。」

やったのは俺だが、初対面でいきなり恥を掻かせるのは色々まずいので睨みながら注意する。

「ご…ごめん…。」

叱られたノーヴェを見てスバルとティアナも落ち着いたようだ。

「おほん、まあ既に聞いていると思うが自己紹介をさせてもらうぜ。俺の名はライル・ディランディ、見ての通りニール・ディランディ…兄さんの双子の弟だ。」

「さっきはお見苦しいところをお見せしてすみませんでした。私はティアナ・ランスターです。皆ティアって呼んでいるのでそう呼んでください。で私の隣に座っているのが…スバル、挨拶。」

ティアはのんきにジュースを飲んでいるスバルを睨む。

「そんなに睨まないでよティア。んつく…初めまして、あたしはスバル・ナカジマです。スバルって呼んでください。」

スバルを見て思うのは…犬耳が似合いそうな子だな。

「おう、よろしくな。ところでノーヴェ、兄さんからスバルやティアナの他にお前に姉さんがもう一人来るって聞いていたんだが…人数が多くないか？」

隣のテーブルにいるウェンディを含めた5人のことを聞かれたノー

ヴェは頭を抱えて唸る。

「確かに、チンク姉だけ誘ったんですが…何でお前らまでいるんだよ！」

そんなノーヴェの叫びも露知らず、ウエンディを含めた4人は和気藹々とお喋りを楽しんでいた。

「えー、別にいいじゃないっすか。」

行儀も何もお構いなしにサンドイッチを頬張りながら喋るウエンディ。っていうか、この子は本当に自由だな。

「時代を超えた聖王と覇王の出会いなんてロマンチックだよ。あと初めまして、私はディエチ・ナカジマです。ちょっと落ち着きのない形での自己紹介で申し訳ないですが、よろしくお願いします。」

「どうも、ご丁寧に。」

ティーカップを置いて、わざわざ立ってお辞儀をするディエチに対して俺も頭を下げる。この子は本当に良い子だし、礼儀には礼儀で返さないと失礼だ。

「陛下の身に危険が及ぶことがあったら困りますし…。」

「護衛としては当然。」

同じく紅茶を嗜みながら話す長い茶髪でカチューシャの似合う女の子と執事服の似合いそうなボーイッシュな女の子。顔立ちが似ているあたり、俺と同じ双子かもしれない。

その中で一人だけ、長い銀髪で右目に眼帯を付けている小柄な少女が紅茶を飲みながらクールに話を聞いていた。

「すまんなノーヴェ、姉も一応止めたのだが……。あと申し遅れてすまない、私はチンク・ナカジマ。そしてそっちの双子が……。」

「オットーです。」

ボーイッシュな女の子がオットー。

「デイドです。」

カチューシャの女の子がデイドって訳か。

「うーん、まあ見学自体は構わないけど余計な茶々は入れんなよ？
ヴィヴィオもアインハルトもお前らと違って色々繊細なんだからよ。」

ノーヴェがチンク以外の4人に注意する。

「「「はい。」」」」

ディエチは大丈夫そうだが、ウエンディと双子ちゃんは妙に元気に返事するから少し心配になる。

あと双子ちゃん、お前らは何故そこでサムズアップする。

心の中で突っ込むが口には出さない。

「ノーヴェ、ライル叔父さん、皆ー！！」

店前の通路から元気な声が聞こえて、俺を含め全員が声が聞こえた方向を向く。

そこには、学校帰りで制服を来たヴィヴィオ、リオ、コロナがいた。俺の名前をさらっと言ってくれたことが少し嬉しかった。

「こんにちはー。」

「あー、やかましくて悪いな。」

「ううん、全然。」

ノーヴェとヴィヴィオが話している間に、リオとコロナはスバルとティアナに挨拶をする。

オットーとデイドは立って頭を下げる。…さっき思ったことは前言撤回、心配する必要はないようだ。

「こんにちは。叔父さんは何でここにいるの？」

「兄さんに頼まれて、ここにいるんだ。」

「やっぱりそっか。いつもじゃないけど、過保護な気がするんだよね。」

呆れと共に愚痴を言うヴィヴィオ。邪険にしている感じではないが、少し不満に思うようだ。

「はははっ、けど兄さんは兄さんで大切に思っているのは間違いないし、それに…。」

それに、聖王オリヴィエのクローンというだけで狙われることもあると兄さんから聞いたし、そんな兄さんも俺以外の家族を一度失ったことで、自分を犠牲にしても新しく出来た家族を失うのが恐がっていることが俺には解った。

が、そんなことを今ヴィヴィオに言えるはずがない。

「それに、どうしたの？」

「いや、何でもない。気にしないでくれ。」

誤魔化しとして、自分の腰ぐらいの身長しかないヴィヴィオの頭を撫でる。

撫でられたヴィヴィオは気にするのを止めて、ノーヴェの椅子の背もたれに寄りかかる。

ノーヴェがこれから来る子について説明している間に、俺はポケットに入っているサバーニャを取り出す。

「何でしょうか？」

>少し暇潰しにイメージファイトをやりたいから兄さんからもらった仮想戦闘データを出してくれ。<

これは兄さん、ひいては兄さんの奥さんであるのが9歳頃からやっていた2つ以上のことを同時に思考・進行させるマルチタスクの一環である。

「では、今回は大型ワームが4体でフィールドが砂漠のパターンD 315にします。制限は無しですか？」

どのパターンのイメージになるかは基本的にサバーニャに任せている。

>ああ、それで頼む。<

誰も座っていないテーブルの周りを囲む椅子の一つに座って、イメージファイトを開始。

今回のフィールドとなる砂漠が脳裏に広がり、地中から大きさが10mぐらい、ミミズのように歯が内側に向かって生えた口が不気味なワームが4体、顔を出す。

俺の姿は既にGUNDAMフォーム、つまりはガンダムサバーニャそのものとなっている。

>いくぜ、ライフルビット展開！<

腰の後ろに備え付けられたスラスターから伸びるアームに左右5基ずつ設置されたホルスタービットからライフルビット？が10基飛び出す。

そのうち2基からグリップがせり出て、左右の手で掴んで取り出し、前方の2体の頭に向かって撃つ。

本来ならビームの色はピンクだが、俺にも魔力光の色というのがあり、ビームの色がライトグリーンになっている。

そのライトグリーンがビームが2体のワームの頭に命中する。

しかし貫通はおろか、命中した箇所が僅かに焦げただけだった。

「このワームは頭の殻が硬いため、砲撃など威力の高い魔法でないと倒せません。さあ、どうしますか？」

生憎、最終決戦のような砲撃をする暇がないし、そもそもホルスタービットの数も足りない。

弱点があるだろうが、殻の固い4体もいるせいで簡単には見つけれない。なら……

＞そんなもん、一点突破あるのみだ！＜

そうと決まれば、まずは前方の2体に当てた頭に5発ずつ当てる。

＞やっぱ硬えって、危ねっ！＜

後ろから1体が突っ込んできたのが影ですぐに気付き、前進して避ける。

>キュアアアアア! !<

だが、奴らの棘の付いた尻尾らしきものが俺を突き刺さんと地面から突き上げてくる。

しかも鳴き声が黒板を引っ掻いたような音みたいで耳に痛い。

「ちっ!」

更に尻尾の棘がまるでミサイルのようにシャワー状に発射された。

流石にこれはライフルビット?があっても捌ききれないため、上下左右に回避する。

「何だかデジャヴを感じるぜっとお!」

棘の雨が止みライフルビット?でワームを全部牽制しながら上昇、ワームが伸びても届かない地点、約100mの高さまで到達する。

「やってしまいましたね、マイスター。あのワームは尻尾の棘から出すガスで100mでも届くジャンプが出来ます。」

サバーニヤがそう警告を出すと、警告通りワームが紫のガスを噴き出して一斉に飛んできた。

「へっ、俺をなめんじゃねえぞ!」

それでもサバーニヤが裏を搔く性格だということを数日のイメージファイトで理解していた俺はライフルビットを前方に展開、飛んで

くるワームに向かって乱れ撃つ。

幸い、ワームが捕食しようと口を大きく開けていたため、口の中に集中的にビームの雨をぶち込んでやった。

お蔭で4体のワームは口から煙を出しながら落下していった。

「イメージファイト終了、スコアを記録しますか？」

>当然記録だ。<

「了解しました。」

そうしてイメージで出来た砂漠が頭から霧散し、元の喫茶店へと意識を戻してみたら、足音が聞こえてきた。

「失礼します。ノーヴェさん、皆さん、アインハルト・ストラトス参りました。」

碧銀の髪が印象的な女の子がノーヴェの方へと歩いていく。

……アインハルト・ストラトス？

ま、まさか、あの時の嬢ちゃんなのか！？

ヴィヴィオはアインハルトを一目で気に入ったのか、じっと見たまま目を離さない。

「すみません、遅くなりました。」

「いやいや、遅かねえよ。でなアインハルト、こいつが例の…」

明らかに兄さんやなのはに見せる表情と違う、待ち焦がれていた…そんな感情がヴィヴィオから読み取れる。

「えと…初めまして！ミッド式のストライクアーツをやってます、ヴィヴィオ・D・高町です。」

ヴィヴィオが手を出すと、アインハルトもそれに応じて握手を交わす。

「ベルカ古流武術、アインハルト・ストラトスです。」

…などと冷静に分析しているが、何故か嫌な予感がしてならない。そういう予感はいつも当たる。

頼む祖国の大英雄、クーパーリン！ゲイボルグで俺に起こる災厄を刺し貫いてくれ！！

「あの、アインハルトさん？」

ヴィヴィオと握手したまま呆けているアインハルトにヴィヴィオが困惑した表情で尋ねる。

「…ああ、失礼しました。」

「まあ二人とも格闘技者同士、ごちゃごちゃ話すより手合わせでもした方が早いだろ。場所は押さえてあるから早速行こうぜ。」

「はい。ですが、その前にその人にも一言言っておきたいことが…。」

「そうなのか？」

「ということはやはりあの時の嬢ちゃんか。」

「ああ、あの時のことは別に気にしてないから、別に謝らなくてもいいぜ。」

「いえ、怪我をさせてしまったことは申し訳なく思っているのですが…その…」

「右胸を揉んだことは、わざとなのか、そうでないのか教えて欲しいのです。」

「ゲイボルグは…俺の心臓を刺し貫いた。」

「「「……………最低。」」」

「ノーヴェ、ティアナ、ディエチの冷たい眼が突き刺さる。」

「最低ッス。」

「ウェンディが胸を隠しながら睨む。」

「ライルさん、それはないですよ。」

呆れるスバル。

「ライルさんの趣味はロリコンか…。」

勝手に納得するチンク。

「……………プイッ。」

眼を合わせようもしない双子。

「ヴィヴィオ、アインハルトさん、こっちに来て！」

「その人に近付いちゃダメだよ？」

自分たちのところに来るよう促すリオとコロナ。

「お、おい、それは誤解だ！あの時は気絶していたし、事故だ、不可抗力だ！お前だけでも信じてくれヴィヴィオ！！」

声高々というか、いっぱいいっぱい必死に訴える俺にヴィヴィオが顔を向ける。

その笑顔は天使のようなスマイルで…

「これからはあまり近付かないで下さいね、ライルさん」

死刑宣告の悪魔の言葉だった。

「クリス、セットアップ。」

ずっとヴィヴィオの隣で浮遊しているクリスに笑顔で指示を出すヴィヴィオ。

「スコシアタマヒヤソウ、オジサン。」

ヴィヴィオの後ろに魔王が見えた。

「…一閃必中、アクセルスマ——————ッシュ!!!!」

拳に虹色の魔力を纏ったアッパーが、見事に俺の顎を捕らえる。

「はっ!? ラ、ライルさん、大丈夫ですか!？」

脳が揺さぶられ意識が途切れる寸前、アインハルトが俺に近付いて謝っているのが見えた。

素直過ぎるつつうのも考えものだな、サバーニャ……………ガクッ…。

ヴィヴィオside

アインハルトさんと初めて会った私ですが、何故か不思議と懐かしいような、心が暖かくなるような感じがしました。

まるでずっと逢いたかった恋人に漸く逢えた、そんな感じです。

でも挨拶の後のアインハルトさんの一言で、つい間接的とはいえ台無しにしたライル叔父さんの顎を捕らえて吹き飛ばしてしまいました。

胸を揉んだのは、事故なのは解ったのですが、雰囲気上台無しにされてつい…キレてしまいました。

その叔父さんは皆と同じように立って見学してます。ただアインハルトさんが自分の誤解ということで場が収まったものの、何人かが今でもライル叔父さんと距離を取っているので流石に落ち込んでしまったようです。

後で叔父さんに謝ろう…。どんなこともやりすぎはいけないもんね。

それはさておき、今私は区民センター内のスポーツコートでアインハルトさんとのスパリングをするため、準備運動をしています。

私は赤いTシャツに白いスパッツと動きやすい格好に怪我をしないように手足に防具を着けています。アインハルトさんはグレーのタクトップに白いTシャツ、緑色のスパッツで手足の防具は私と同じです。

相手のアインハルトさんは終始無表情で準備をしています。心中でどんなことを考えているのかはまだ解りません。

でも、一度手合わせをすれば少しでも解るはずです。

準備も終わり、互いに構えを取るとアインハルトさんの足元からべ

ルカ、それも古代のものの魔法陣が出てきました。身体を強化する魔法だと思いますが、それよりも今から始まるスパ―が楽しみになってきました。

「スパ―リング4分1ラウンド、射砲撃と拘束バインドは無しの格闘オンリーな。」

審判はノーヴェ、そしてこの場所を取ってくれたのもノーヴェ、本当に頭が下がります。

構えた状態で小さくステップ、いつでも突っ込めるようにする。

「レディ…ゴー！」

開始と同時に距離を詰め、右アッパーで防御を崩しに掛かる。

でもアインハルトさんに防ぎきられてしまう。

左ジャブ、右フリッカー、右ハイキックと隙を作らないようにラッシュをかけていく。

「ヴィヴィオって…変身前でも結構強い!？」

でもアインハルトさんは何でもないように捌き、避ける。

「練習頑張っているからね。」

全然強くないと言いたいけど、今は目の前に集中!

ジャブの連打で牽制して、右アッパー！

と拳を振り上げたところで下に潜られ、懐に入ってしまった。

大きな隙を作ってしまったと思ったところで、胸の中心に掌底を当てられて吹き飛ぶ。

でも壁にぶつかる場所にオットーとデイドが入ったお蔭でぶつからずに済んだ。

それにしても、掌底でここまで飛ばすなんて…アインハルトさんは、スゴいっ！！

でもアインハルトさんは浮かない表情で私に背を向ける。

「お手合わせ、ありがとうございました。」

さっきまで楽しかった時間が一瞬にして…雲がかかったように重い空気に変わりました。

「あの…あのっ！！すみません、私何か失礼を…？」

「いえ。じゃ、じゃあ、あの、私…弱すぎました？」

「いえ…」

趣味と遊びの範囲内

でしたら充分すぎる程に。」

私が伝えたかったことが伝わっていませんでした…。

「申し訳ありません、私の身勝手です。」

肝心なことが伝わってないなんて、そんなの悲しいよ！

「あのっ！すみません…今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります！今度はもっと真剣にやります。だからもう一度やらせてもらえませんか？今日じゃなくていいです、明日でも…来週でも！」

アインハルトさんが強いのは…強くなりたいのは解りました。だから、私も真剣に強くなりたいたんだと伝えるためには一度だけでなく何度でもぶつかっていく必要があるんだと強く思いました。

ライル side

23…39 高町・ディランディ家

結局スパーリングはアインハルトが止めたことで中止となり、その場はお開きとなった。

ずっと顎が痛かったが、それよりもヴィヴィオとアインハルトのことが気になったため、気にしていられなかった。

だが、ヴィヴィオの願いで来週に練習試合という形で二人は再び相

対することになった。

ヴィヴィオは帰ってから浮かない顔のままだった。

で俺はというと、兄さんとなのはと共にリビングで今日の話を話していた。

「そうか、やっぱりヴィヴィオが伝えたかったことは伝わらなかったか。」

「うん、ノーヴェが言うには長年の積み重ねと当時の動乱も絡んでいるから難しいんだよね…。」

霸王イングヴァルドと聖王女とも聖王とも呼ばれたオリヴィエ、彼らの別れが：イングヴァルドが抱いたオリヴィエを救えなかったという強い後悔が、今のアインハルトが強くなりたいたいという願いと結びついている。

「兄さんたちがどう思うか知らねえが、この問題はアインハルトとヴィヴィオたち本人で解決するしかない。」

「うーん、私達に出来ることは機会を少しでも多く作ることだと思うんだけど…。」

なのは俺の意見に対してやんわりと異見を述べる。一つ言葉が足らなかった…。

「それはノーヴェたちが真っ先に動いているから心配ない。そういうことだろ、ライル。」

流石に兄さんは俺の考えを解っている。もとい、フォローをさせてしまった。

「にしても、ヴィヴィオって何だか刹那に似てるところねえか？」

何というか、諦めの悪さといい、分かり合おうという姿勢といい、純粹なところも似ている。

実際、9時まで近所の公園で練習をしていた。

「ははっ、それを言ったらなのはも似ているところがあるぜ。無茶するところかな。」

確かに無茶していたな。肩を撃たれたまま戦ったこともあったしな。

それで連戦に耐えきったんだから流石だ。

「むう、イジワル…。」

拗ねたなのはは、頬を膨らませてそっぽを向く。

正直、兄さんも無茶をすることがあるが、今言うとアインハルトの件が絡んでややこしくなるので言わないでおいた。

「そんなに拗ねるなって。さて、そろそろ寝ようぜ。なのはの体に響いたら大変だ。」

なのはに寝るように促す兄さん。実際もう日付が既に変わっている。

「うん、お休みなさい。」

大人しく従うのはは兄さんと共に寝室がある二階へ続く階段を登っていく。

俺もここで考えることがこれ以上ないため、兄さんたちの家を出て隣のフェイトの家へと歩いていった。

t o b e c o n t i n u e . . .

第4話 時と世代を超えた出逢い（後書き）

ティエリア side

彼に案内されて暫くして、森を抜けることが出来た。

するとそこには、宿泊施設らしき建物と別荘と思われるコテージがあった。

「君は、ここに住んでいるのか？」

虫人間らしき彼は首を縦に振って肯定した。

「あつ、ガリユーお帰りなさい！」

そこに薄紫の綺麗な長髪の14歳ぐらいと思われる少女が箒を持ってこっちに来了。

「山菜は取れたの…ってガリユーの後ろにいる人は誰なの？」

虫人間：ガリユーは少女に向けていた目をこっちに向ける。

眼が自己紹介をしてくれと訴えているように見えた。

「僕の名はティエリア・アーデ。森で彷徨っていたところで彼、ガリユーに助けてもらった。」

伊達眼鏡のズレを直しながら名前とどうしてガリユーの後ろにいるのかを紹介した。

「名乗ってくれたのならこっちも名乗らないとね！私の名前はルーテシア・アルピーノ。ガリユーは知っているから後はママだけね。」

そこにルーテシアによく似た母親らしき人がロッジの入り口から出て来た。

…いや、ルーテシアが母親似なのか。

「ルーテシア、お客様が来ているの？」

「うんママ、紹介するね。この人はティエリア・アーデさん。」

「よろしくお願いします。それで、非常に差し出がましいのですが、しばらくここに置いていただけないでしょうか？」

正直怪しまれるのが普通なら断られるだろう。

「私からもお願い。この人はいい人だってガリユーも言っているし。」

彼の言葉が解るのか！？後で訳を聴いてみよう。

それより、まさか好転するとは思わなかった。

「ええ、いいわよ。」

まさかのあっさり承諾…ここまでトントン拍子になるとは思わず、裏があると思ってしまう。

「よかったね。でも、働かざるもの食うべからずとも言うし、しっかり働いてね。」

笑顔で僕に働くよう促すルーテシアだが、その方が僕も遠慮しなくて済む。

「ただで置いてもらうのは忍びないかと思っていたから丁度いい。よろしく、ルーテシア、ガリユー、あと…」

「メガーヌ・アルピーノよ。よろしくね、ティエリアさん。」

かくして、僕はアルピーノ家で居候兼手伝いをするようになった。

番外編1 対話への後押しと生きている喜び（前書き）

まず本来なら二ールが刹那の夢を見る話はもう少し後にする予定でしたが、思ったより集中して書けたので更新します。

アンケートで聞くとか言っておいてフライングしてしまいすみません。

時系列としては、Vividの物語が始まる一ヶ月前辺りです。

ただ、この話は後々非常に重要な話となってきます。

番外編1 対話への後押しと生きている喜び

―ニールside

それは、ヴィヴィオの学校が新学期、つまりはアインハルトとの出会いのすぐ前の話だ。

いつものように夕方に仕事を終わらせ、妊娠中のなのは毎日ストライクアーツの練習に励んでいるヴィヴィオと夕食を食べ、風呂に入って寝た時のことだった。

ベッドに入り眠りに就いたら次の瞬間、成長した刹那がトレミーのメディカルルームで昏睡状態で寝台に寝かされているのが見えた。

メディカルルームを覗ける窓には成長しショートヘアになったフェルトが心配そうに見つめている。

状況がよく分からないが、少なくともここまで苦しむ刹那の姿を俺は見たことがなかった。

これでは埒が明かないため、普段は使わない脳量子波で刹那の意識を、何故苦しんでいるのかを探ってみる。

刹那の意識に渦巻いているのは、

KPSAに洗脳されていたとはいえ両親を撃ち殺してしまったこと

への罪の意識

銃を持ちながらアイルランドの自爆テロで家族を亡くして泣き叫ぶ俺から目をそらす幼い頃の刹那：ソラン・イブラヒム

撃ち貫かれ血の海に沈む刹那と同じ少年兵

道を示すかのように立つマスード・ラフマデー

叫び嘆く武力介入時の刹那

その先にはなのはたちに出会う前の、散ろうとしていた俺

右半身が吹き飛ばされて事切れたリヒティ

そのリヒティを背中に大きな破片を指されながら抱えるクリス

俺たちに手を伸ばそうとして届かない刹那の掌は血に染まっていた。

これだけで、刹那がどれだけ苦しんできたのかがよく解る。

そんな刹那に大丈夫か、お前は悪くない、気にするなと声を掛けたくなるが、そんなものが届くはずないし、そんな言葉を求めているはずがない。

だけど、いつまでも苦しんでも仕方ない。過去は変えられない、でも未来をより良き方向へ持っていくことが出来る。今お前がどんな状況に陥っているのか、どうして倒れているのかは分からない。

だからこそ、俺が出来る精一杯でお前に今一度この言葉を送る。

「言っただぜ刹那

お前は変わるんだ

変われなかった俺の変わりに。」

その世界ではという言葉は省いた。何故なら、その世界では俺は既にいない人物だからだ。

過去の苦しみを今こそ越えて、自分が成すべきことを成し遂げるんだ！！

ふと目が覚める。

日差しが弱い辺り、まだ早朝のようだ。

体を起こし、目に違和感を覚えて手で触れてみると、何故か涙が流れていた。

「ふああ…どうしたの、二ール。」

体を起こしたことで起きてしまったのか、なのはが眠そうに目を擦りながら真上を向いていた顔をこっちに向けてきた。

涙はそんなに出ていなかったため、パジャマの袖で拭って涙が流れ

ていたことを誤魔化す。

「いや、昔の仲間が夢に出てきてな…。」

どちらかというとし…の夢に入り込んだというべきだが、ややこしくなるため、言わない。

「それって、刹那っていう男の子？」

…俺の奥さんはどれだけ勘がいいんだ。

もう革新しているんじゃないのかと思うぐらいの鋭さだ。

「ああ、あいつは…。」

「よく突っ込んで俺がフォローに回って苦労した、でも誰よりも自分のやることを決めていて、がむしゃらにやり通す…でしょ？」

説明しようとしたところで遮られた…。

「何で解ったって顔しているけど、もう2回も同じ話を聞いているんだよ？」

2回話ただけで解ることでもないだろうと突っ込みたくなるが、なのはは理解するのが早いのは今更なので言わない。

「全く、こういうところは最近敵わなくなってきたまいるぜ。」

あまりにどうしようもないので、両手の掌を上以降参の意思を見せる。

「ふふ、やられっぱなしじゃないもん。」

いたずらした時のように舌をチロツと小さく出すのは。

「分かったから、もう一度寝ようぜ。」

「それなら遠慮なく、お休み…二…ル…。」

瞼を閉じて再び眠るなのは。

「お休み、なのは。」

俺も起きていても仕方ないので眠気に身を委ねる。

刹那、お前は生きる意味は見つけられたか？

俺は見つけたぜ。新しい家族と満足するまで幸せでいること、そして幸せにすることだ。

お前にも見つかったっているといいな…。

苦しんだ分、お前にもなきやおかしいってもんだ。

なあ、刹那…。

刹那 side

眠っていたのか、何故かロックオン、ニール・ディランディが金色に輝かせた瞳で俺を見ていた夢を見た。

それは、脳に損傷を受けて昏睡状態だった時もそうだった。何故か生前の、それも右目の眼帯を付けてない状態だったのだ。

とはいえそれは飽くまで夢であり、現実ではない。ロックオンは死んだのだ…。

俺は、クアンタでの対話によりELSの母星で対話をする事になった。今は量子ジャンプを使って移動している。

おそらく途方もなく長い旅になるだろう。20年かもしれないし、50年かもしれない。下手すれば100年かもしれない、そこまで長い旅だ。

しばらくやることがないため、俺は一緒について来たティエリアに話し掛けてみる。

「ティエリア、少し昔の話をしてみよう。」

だが、ティエリアの反応がない。

ターミナルユニットにも反応がなく、ヴェーダも反応しない。

だから、まだそこまで離れてないだろうヴェーダにターミナルユニットを介してアクセス、ティエリアがいるかどうかを確かめてみることにした。

ヴェーダの生体端末であるイノベイドではなく、元々人間である俺にアクセス出来るか不安だったが、どうにかなったようだ。

「ん？君は刹那・F・セイエイか。成る程、君のイノベイターとしての力を使って、ヴェーダのターミナルユニットからこのヴェーダ本体へアクセスしたのか。やはり、人類最初のイノベイターだけのことはある。」

だが繋がったものの、出てきたのはティエリアに似たイノベイドだった。

ティエリアと同じでフォロスクリーンで出てくる。

「お前は一体誰だ？」

「そうか、君とは初対面だったね。僕の名前はリジェネ・レジェッタだ。」

「リジェネ・リジェッタか。」

「リジェネ・レジェッタだ。」

：普段人を名前を間違えないのだが、何故間違えたのだろうか？

「そうか、間違えてすまない。」

気にしても仕方ないので謝る。

「いいよ、気にしてない。ところでティエリアがいらないようだね。君と共に対話を成功させてみせると意気込んでいたけど、クアンタの中にはいないようだね。」

「∴その分ではヴェーダ本体にもいないようだな。」

「ああ、僕にとってティエリアは双子の兄弟のようなもの。戻っていればすぐに気付く。」

ティエリアはこういう時いなくなるならいなくなるで必ず報告する、そういう奴だ。

だが、今回は突然いなくなったため、不自然だ。

それに、ELSとの対話の際にはティエリアがいなくてはならない。ヴェーダを使つての情報制御は俺一人では出来ない。ティエリアの助力なくして対話へ持っていけない。

となれば∴

「そうか。なら、対話の前にティエリアを探さなくてはいけない。」

「∴対話は終わった訳じゃないのかい？」

そうか、ELSの母星へ行くのは知らないのだったな。

「まだ終わってない。むしろ、始まったばかりだ。今はその旅に出たばかりだ。」

「分かった、つまりは今の君とティエリアは先駆者トレイルブレイザーという訳だ。」

上手い表現だ。確かに、今俺は誰よりも先にこの未開の宇宙を駆け抜けている。

世界は、互いに分かり合えると信じていれば、こんなにも簡単だということを示すために。

「そうかもしれないな。だがまずはティエリアを見つけないと。」

「そうだね。僕も君に付いて行けたらよかったんだけど、僕にはヴェーダを内部から管理する役目があるから無理なんだ。…ティエリアを頼むよ。」

そう言い残して、リジェネは姿を消した。ヴェーダへ戻ったのだらう。

この男もティエリアを心配しているようだ。声色もそうだが、表情でそういうのが分かる。

広大な宇宙、どこにいいのかは分からないが少しでも脳量子波を感じたら真っ先にその方向へ移動しよう。

こうして生きる意味を持てたのはマリナにロックオン二人、アレルヤにティエリア、トレミーのクルー、のお蔭だ。だから、助けるのが仲間としてやること、やりたいことだ。

そうして俺は対話の前にティエリアを探索旅に出た。

その旅がまさか思わぬ再会と出逢いになるとはこの時、想像するこ
とが出来なかった…。

番外編1 対話への後押しと生きている喜び（後書き）

刹那の夢を見たのは二ールがミッドチルダ初のイノベーターで、関連の多い刹那と無意識に繋がりが出来て見るようになったという具合です。

…すみません、0012314でのレナードとアーミアとのやりとりから来た勝手な推測で作った設定です。

批判、反論があれば受け付けます。

番外編2-1 武士道と天瞳流（出逢い）（前書き）

タイトルで解ると思いますが、この番外編はグラハムとミカヤが中心となります。

そして、飽くまで出逢いですので、続きがあります。

6月7日 指摘のあった誤字を修正。

番外編2-1 武士道と天瞳流（出逢い）

―― Graham side

部下が散っていく中現れた蒼く緑に輝く剣を携えた機体、その機体に乗っているのが我が最大のライバルである少年：刹那・F・セイエイ。月と同規模の超大型ELSへとまっすぐ進んでいく様子が見えて、隊員たちに指示を出して少年の近くへと向かった。

しかし、何故か少年は撃つのを躊躇っている。

「何を躊躇している！」

そんな少年を見ていられず、傍へ寄り一括する。

「生きるために戦えと言ったのは、君のはずだ！くっ！」

ELSの放つ紫のビームが掠ったことにも構わず、言葉を発する。

「たとえ矛盾を孕んでも存在し続ける、ぐうっ…それが生きることだど！！」

私が隊列を抜けても果敢に攻め続けるソルブレイヴスの精鋭たち。

「トランザムッ！！」

右のGNキャノンが吹き飛ばされるのにも怯まず敵をGNビームライフル『ドレイクハウリング』から放たれるビームで薙ぐ。

「行け、少年！生きて未来を切り開け！！」

少年は私の叱咤激励を受けて前へと進んでいく。

「それでよい、進んでこそ我がライバルだ。」

>た…隊長、囲まれています！<

だが、少年が進んでいったのを見届けていたのが隙になってしまい、小型ELSにいつのまにか囲まれてしまっていたことにネフェルに警告されるまで気付かなかった。

「何、くうっ！」

GNビームライフルで先程と同じように砲撃をしながら一回転、周りの小型ELSを薙ぐ。

戦艦の形をした大型ELSの砲撃が仕返しとばかりに放たれるが、ギリギリで左へ回避。変形、急加速、急停止と高速で接近してくるELSの大群をやり過ごす。

が、右後方から急接近する一体のGN-X？を模倣したELSに気付くも既に遅く…

「ぐおっ！」

遂に背中に取り付かれてしまった。

>そんな…隊長が…！<

機体構造を示すモニターから背中からこのコクピットに向けて赤く表示され、ELSの侵食が進んでいることを表している。

どうやら、遂に私もそちらへ逝く時が来たようだ、ハワード、ダリル。

だが私は軍人、この命尽きるまで生きる為に戦う！それに私はまだ少年の役に立ててない！！

自分の体を見殺したジグザグで最大にスピードを上げた動きで周りを囲む小型ELSをビームで消し飛ばしていく。

「かふっ、この粒子ビームは…少年か！」

と無茶な機動を止め、我慢していた血反吐を吐いたその時、視界がピンクの光一色となった。

少年のガンダムが月を両断出来るぐらいの有り得ない放出量のビームを放っている。

少年のガンダムはそのビームを収束させて、超大型ELSを両断しようとする。

だが、超大型ELSは超巨大粒子ビーム砲の巨大な砲撃を弾いた時と同じように膜のようなものでビームが弾いてしまう。

「それで駄目なら…!?!」

ふと嫌な感覚がしたと座席を見れば、いつのまにかコクピットが侵食され、私自身も今正に侵食されようとしていた。

「うっ、かはっ!」

戦闘時独特の緊張状態が一時的に解けて吐血。にも関わらず内臓の痛みを感じない、いよいよ時間がない…ならば特攻、つまりはカミカゼアタックだ!

最大加速で邪魔なELSをまだ動くドレイクハウリングで撃墜しながら、超大型ELSの膜の部分へと突っ込んでいく。

「少年! 未来への水先案内人は、この、グラハム・エーカーが引き受けた…!」

左はグリップ以外が侵食で操作出来ず、代わりに右手で自爆の操作を行う。

「これは…死ではない!」

この機体には擬似GNドライヴが二つ搭載されている。風穴一つ開けることなど造作も無い…!

「人類が、生きる為の…!」

いよいよシャッターのように閉じていくELSの壁の隙間へと入り込み…耳を劈く^{つんざく}激しい爆発音、そして先に逝く不孝を盟友とまだ戦っている隊員たちへの謝罪を最後に、私は…人類の未来の礎とな

った。

筈だった…。

だが次の瞬間、座っていた感覚が無くなり、何かが私から抜け落ち、
変わりに…

「な、地上だと!?!」

惑星がいくつも見える見慣れない夜空が見え、そして浮遊のち落下
する感覚が私を襲った。

「ぬうううおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

ミカヤside

私の名前はミカヤ・シェベル、抜刀居合術「天瞳流」の師範代を務
めている。

毎日、ジークリンデ・エレミアの打倒を目標に日々鍛錬を欠かさず
行っている。

だがその日常に、いや、自分に今までになかった変化が起こった。

それは4月に入ってからのこと。

いつも通り、夕方になり道場での稽古を終えて掃除をしていたら…

「ぬうううおおおおおおおおおっ!!」

突然何かが天井を破って落ちてきた。

「な、何だ!？」

道場の隅で雑巾掛けをしていた私はすぐ落下場所へと向かった。

道場の天井を破って落ちてきたのは、全身を覆う白いスーツでヘルメットを被った男だった。

が、ヘルメットから覗く男の顔をよく見ると血を吐いている。黄色のバイザーだが、明らかに口元に黒ずんで見えるものが垂れている。

慌てて落下場所から運び、仰向けにしてヘルメットを取ると、案の定男は口から血を吐いていた。

その男は身長が180cmぐらひはあり、金髪で、所々髪が跳ねている。だが、それ以上に額、右目と右頬にかけて広がっている傷痕と端正な顔立ちが目につく。

時空管理局ではなさそうだが、顔の傷や鍛え上げられた体つきを見る限り軍人のような戦いのプロなのは間違いないだろう。

とにかく意識がないようだから、運ばなくてはいけない。

と頭を膝に乗せて、両手で男の脇を持とうとしたところで男が目覚めた。

「ぬっぐっ…ここは…涅槃、と呼ぶには違いがありすぎるようだな。

それに君は何故私に膝枕を？」

開口一番に奇妙なことを言う。

膝枕にしているのは、他に枕に出来るものがなかったからだ。

「それは、貴方が私の道場の天井を破って落ちて、意識を失っていたからです。」

と男が顔を穴の開いた天井に向けると、いきなり起き上がり、私に向かって正座、そして土下座をしてきた。

流石に私も面食らってしまった。

「君の大事な道場の天井を破ってしまったて申し訳ない！私にはどうしてこうなっているのか分からないが、壊してしまったものは弁償しなくてはならない！！」

おそらく、敵意がない限りは誠意をもって接する、そんな男なのだろう。

「か、顔を上げて下さい！確かに驚きましたが、怪我をしている貴方にそこまでされてしまうとこちらの方が申し訳なくなってしまう。それより、貴方の名前を教えて下さい。」

彼が生真面目で紳士的な性格だと分かり、許すことにした。

「私の名前はグラハム・エーカー。地球連邦軍所属の軍人だ。」

「地球連邦軍？時空管理局ならともかく、そんな組織は知りません。」

ナカジマちゃんが以前に地球という管理外世界があつて、その地球出身の管理局員を3人も知っていると云っていた。

連邦軍というのなら国を統合して出来た軍隊ということだが、ナカジマちゃんからそんな組織があるとは聞いていない。

「…地球連邦軍を知らない？それに時空管理局とは何だ？」

このミッドチルダで時空管理局を知らないということは有り得ない。

「グラハムさんの言い分から察するに、グラハムさんは多分次元漂流者…ということになります。言い方が稚拙になってしまいましたが、宇宙規模の迷子ということです。一応、知り合いから地球という惑星があるとは聞いてますが、地球連邦軍という組織は存在してません。つまりは、その地球とグラハムさんが生まれ育った地球は別物ということになります。時空管理局は詳しいことは私には分かりませんが、ここミッドチルダ含めた次元を守っている軍隊と言えます。」

私はグラハムさんが動揺、或いはショックを受けると思っていた。

だが、グラハムさんは驚くどころか力なく笑うだけだった。

「ふっ、そうか…。」

私には何故それだけで終わらせられるのか解らなかった。元の世界

に未練が無いのだろうか？

私はここにいたい。私には、道場の運営とインターミドルでのジークリンデ・エレミアの打倒とチャンピオンになることなどここでやることがあるのだ。

だが、グラハムさんは私が思っていることに気が付いたのか、もう一度わざとらしく微笑んだ。

「私が一言で終わらせたのが不思議なようだ。何故なら：

私は、本来既に死んでいたはずだからだ。」

私は驚きで目を見開いた。

グラハムさんが嘘を言っているとは思えない。いや、この人の性格からして姑息な手段、嘘をつくのは嫌いなのだろう。何よりその瞳は真っ直ぐに私の目を捉えている。

よく見れば凛々しい。そして顔の傷も相まってかっこいい。

：普段御目に掛かれないような堂々としたタイプの男だからか、余計なことを考えてしまったようだ。忘れよう。

「私がここに落ちる：いや、落とされたというべきか？まあいい。その前に、私はかつてない強敵と戦っていた。戦力差は100000..1、この上なく最悪な展開の戦いは初めてだった。」

圧倒的な戦力差に想像が追いつかない。

だが普通に考えれば…結果としては…

「まず勝てる道理のない戦いだ。それでも、私達が戦わねば私達の世界が減んでいたかもしれないのだ。」

本物の戦場に立ったこともない私が言うのはおこがましいかもしれないが、試合は勝つこと、負けても学ぶものがあることはある。しかし、戦争となれば死が付き纏い、死んでしまえば後がない。

だが、私はここでグラハムさんの言葉に何かが抜けていることに気付いた。

「それで、相手はどのような敵だったのですか？」

ここまで見た目で強いと解るぐらいの彼が勝てない言い切った相手なら、まずその相手のことを言うはずなのだ。試合にしても同じこと。なのにさっきからその片鱗すら話してない。その訳は…

「…すまない、何故かその敵のことが全く分からなくなっているのだ。」

落胆した表情をするグラハムさんに本当かとまだ記憶がないと決まった訳ではないため、言葉を掛けることが出来なかった。

「…無理に思い出そうとしなくてもいいですよ。圧倒されるぐらい

の強さなら思い出したくない…」

「違う!!」

突然怒鳴ってきたグラハムに思わず硬直する。

何て気迫だ、私が圧されてしまうなんて…。

「思い出さなくてはいけない、そう思うのだよ…!」

私は自分の失態に気付いた。相手を知るという欲を優先してしまった。グラハムさんのことを疑ってしまった。

「…怒鳴ってしまったてすまない。」

「い、いえ、私の方こそ失礼なことをしてしまい申し訳ありません。」

私は自分自身の反省の意も込めて、土下座をする。

「…ふっ、ふふっ、ははははははははははっ!!」

突然グラハムさんに笑われて唾然としてしまった私。多分間拔けな顔をしているだろう。

でも、笑われた理由が『お互い土下座している』ことだと解り、私も可笑しくなってしまう。

「は、はは、あははははははっ!!」

腹を抱えて笑うなんて久しぶりだ。

「はははははは、いや、私と君はどうやら似た者同士かもしれないな。」

「ははは、そうかもしれませぬね。」

性格などの違いはあるけど、きっと通じ合うものがあるんだろうと思う。

：私はこの男が好きになった。恋愛感情というのはまだよく解らないが、この男の真摯な瞳には心惹かれるものがある。

「そう言えば、申し遅れました。私の名はミカヤ・シェベルです。この道場、抜刀居合術『天瞳流』の師範代をしています。」

「抜刀居合術だ?!? 何という巡り合わせ、君と私は出逢う運命だったようだ!!」

前言撤回、少し変わり者でもあるようだ。：何故か、何かが音を立って崩れたような気がした。

「えっと、興味があるのであればしばらくここにいませんか?」

本来なら管理局に連絡して保護してもらおうというのが本来の次元漂流者への対応だけど、グラハムさんのことがもっと知りたい私は自分の家で居候してもらうことにした。

「それはありがたい！だが、まずは休ませて欲しい。激戦の疲れが出て限界に近い。」

今は既に19時を過ぎている。

「そうですね。それに今日は遅いですし、休みましょう。」

これがグラハムさんとの出逢い、彼との出逢いで私は未知の体験をすることになる…。

番外編 2-1 武士道と天瞳流（出逢い）（後書き）

誤解がないように言いますが、ミカヤはこの時点で恋愛感情には至っていません。

飽くまで戦士として尊敬出来るという感情が強いです。

でも、もしかしたらミカヤの喋り方がおかしいかも…。

そして、グラハムはこの時点でデバイスを持っていません。

デバイスは造ることになりますが、それについては次に持越しです。

第5話 覇王に届け、私の想い！そして、生まれ来る新たな命（前書き）

また更新が一ヶ月過ぎてしまった…。本当にすいません。

今回は、タイトルとテーマに大きく関わる重要な内容だけに苦勞しました…。

詳しくは後書きで。

それにしても、どうにも私の執筆のクオリティーが下がっている気がしてならない…。

第5話 覇王に届け、私の想い！そして、生まれ来る新たな命

—ライル side

9..26

あれから一週間が経った。

ヴィヴィオは毎日欠かさずノーヴェと一緒にトレーニングをして、アインハルトとの試合の為に既に出かけて行った。

俺もそんなヴィヴィオに触発されて、毎日魔法のトレーニングをしている。

攻撃魔法のコントロールの為に缶を当てる練習、兄さんに教えてもらった魔法の練習、なのはがイメージファイトと共にやっていた『魔導士養成ギプス』など、とにかく魔法に慣れる練習をしているのだ。まあギプスとは言っても、魔力に負担を掛けるリストバンドを両腕に付けているだけだが。

で今はそのギプスをした状態で10kmを走り終えたところ。

タイムは50分ジャスト、本当なら35分とかはいけるんだが、ギプスの影響がやはり大きい。

「ふう、ふう、やっぱり…この状態で動くのはきついな。」

筋トレのように体が重く感じる。

まだ朝日で、外の空気が15度と涼しげなのが幸いだ。俺も兄さんもそうだが、育った環境が寒いか涼しいが多かった為に暑いのが苦手だ。

「それでもこれが続けていれば確実に魔力総量が増えますし、コントロールも容易になります。ただタバコはしばらく控えた方がいいですね。」

実は俺の魔力ランクはC、このままではサバーニヤを使いこなせないらしい。

当然か、サバーニヤの力を発揮するにはCだと出来ることが限られる。

「まあ、こういうのは地道にやらねえとな。しかし、お前との賭けに負けちまったなあ。」

実はつい数日前、タバコをここにいる間禁止するようにサバーニヤから言われていた。

だがストレス解消で吸っていた俺は反対、それでも引き下がらないサバーニヤに条件として『10kmマラソンをした時に45分以下ならタバコは禁止する』という約束をしたのだ。

結果は、5分オーバーで俺の負け。この世界ではタバコとオサラバすることになった…。

「では、タバコをダストシュートして下さい。」

さようなら、俺のタバコ…。

そんな別れの言葉を心の中で呟きながら公園の備え付けの金属製のゴミ箱へとダストシュートした。

持っていたタバコに別れを告げてフェイトの家へ入ろうとしたら、なのはが大きく膨らんだお腹を気にしながら自分の家の庭で箒を掃いていた。

「お帰りなさい…どうだった…？」

笑顔だが、どうにも無理をしているように見える。いや、疲労の色が濃いし顔色が悪い。

「ちときついが練習になったぜ。それより大丈夫か？気分が優れないように見えるが。」

女性の妊娠や出産の知識は残念ながら俺にはないが、この様子だけでももうすぐ生まれることが分かる。

「マイスター、レイジングハートから念話です。」

サバーニャからの念話に一言繋ぐことを伝える。

「ここ数時間、お腹の胎児が動いています。その上で腹部からの激しい痛み、つまりは陣痛が始まっています。申し訳ないのですが、私はこのままマスターの様子を見ているので二ールに病院へ連絡してもらうように伝えてもらえませんか？それが出来たら、フェイト

にも連絡をお願いします。」

初めてのことで慌てそうになるが、慎重にしなければ最悪彼女の命に関わると思い、落ち着くように深呼吸する。

落ち着いたところで冷静に考える。

レイジングハートの報告でなのはの状態が一刻を争うことが分かった。

そして、今日ヴィヴィオがアインハルトに認めてもらうための試合が廃棄倉庫の一角で行われる。

なるほど、真剣に練習していたヴィヴィオの邪魔にならない為にやせ我慢していたって訳か。

まったく、意地を張りやがって！

「…大丈夫だよ。今日はヴィヴィオにとって大事な日だから少しぐらい…我慢…ううっ。」

俺の心境を察してか、やせ我慢を言うものの、持っていた箒を手放してお腹を抑えだす。

「お、おいっ！」

更に座り込む形で崩れそうになったのはを、お腹に衝撃が行かないように、そして触らないように配慮しながら脇を持って崩れるの

を防ぐ。

流石に二人分の命を宿しているからか、割と重い。が、ガンダムマイスターとしての気概も相まって気合で支える。

ここで抑えなくてガンダムに乗っていられるか!!

それにしたって、フェイトが以前になのははよく無茶をすと言っていたが、これは無茶しすぎだ!

その証拠に泣きそうになるぐらい痛いのか、目に涙を少し溜めている。

「急いで連絡をお願いします。」

レイジングハートも焦っているのか、淡々としながらも急かしてくる。

>分かった、すぐ連絡する! ヴィヴィオにはアインハルトとの試合が終わってから伝えるか? <

「はい。ではケルデイルとバルディッシュに繋いでください。」

病院へ運ぶ手配ぐらいは出来る!

>どうした、ライル? <

>まさか、なのはに何かあった? <

ホログラムモニターが出て二人の姿が現れる。兄さんは白い制服、フェイトは黒い制服だ。

兄さんもフェイトも建物、つまりは仕事場の一部であるオフィスにいるのだろう。

「そのまさかだ！陣痛が始まったんだよ！！」

>何！？<

>大変！<

「兄さんは今から病院に連絡してくれ。フェイトは病院に来れるか？」

自分で出来ればやりたいが、残念ながら兄さんじゃないと分からないことが出てくるので断念した。

>分かった、すぐ手配する！その後はそのまま様子を見ていて、救急車が来たら乗らずにヴィヴィオのところへ行ってくれ。俺は仕事がもう少しまだ…<

兄さんが喋っているところで三つ編みで縛った赤い髪の女の子が割り込んできた。

>仕事の方はあたしの方でどうにかするから、二ールは行って来い！父親になるんだからな。<

>…すまねえヴィータ、恩に着る！という訳だ、俺はすぐにそっち

へ戻る。＜

「ああ、分かった。ヴィヴィオは試合が終わったらすぐに連れて行く。」

兄さんは仲間の気遣いでどうにかなりそうだ。

＞私も仕事中だけど、すぐ病院へ行くよ。シャーリー、悪いんだけど…！＜

＞大丈夫です、行ってください！なのはさんとニールさんの子供が生まれるところを見てきてください。私は生まれた後に会いに行きます…！！＜

フェイトの後ろで覗き込んで見ていたシャーリーという眼鏡の嬢ちゃんサムズアップして、フェイトに行くように促す。

＞ありがとう、シャーリー。ライル、ヴィヴィオのことはお願いね！！ニールは焦らないでね！！＜

俺はともかく、兄さんへの気遣いを忘れないフェイト。

＞了解だ！！＜

「オーライ、任せろ！」

今までとは違う戦いが始まった。

ヴィヴィオside

13..20 アラル港灣埠頭 廃棄倉庫区画 試合時間 10分前

本来なら誰もいないこの場所、そこに今、私とノーヴェ、友達のリオとコロナ、チンクとディエチにウエンディ、オットーとディード、ライル叔父さんがいます。

ただ何故かライル叔父さんがいつもよりソワソワしている気がします。右足をまるで相手が待ち合わせに遅れた時のように小刻みに踏み続ける：謂わば貧乏揺すりをしています。そもそも、叔父さんは皆より来るのが遅く、ママの車を借りて来たのです。何かあったのでしょうか思えません。

それでも、試合に集中する為に一度そのことは忘れます。

：今日はアインハルトさんとの再試合。

でもただの試合ではなくて、過去も生まれも関係ない、互いの気持ちを伝えあう試合。

仲良くなりたい、でも私は格闘技ストライクアーツを真剣にやっているんだと伝えたい！

その為の練習を1週間ノーヴェとやってきたんだ。

「お待たせしました、アインハルト・ストラトス参りました。」

スバルさんとティアナさんの後ろからアインハルトさんが来た。

「来ていただいてありがとうございます、アインハルトさん。」

私はお辞儀をしながらお礼を言う。横で浮遊しているクリスも私と同じようにお辞儀をする。

「ここな、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし、許可も取ってあるから安心して全力出していいぞ。」

「うん、最初から全力で行きます。：セイクリッド・ハート、セツト・アップ！」

制服姿から成長し、バリアジャケットを纏った大人モードとなる。

「：武装形態。」

バリアジャケットのような武装を身に纏った大人モードのアインハルトさんは、霸王イングヴァルドが身に纏っていた武装を思わせる格好だ。

「今回も魔法はナシの格闘オンリー、5分間1本勝負。」

いつでも行けるように構えを取る。

「アインハルトさんも大人モード!？」

リオとコロナはアインハルトさんの姿に驚くが、私は集中力を切らせたくないで今そのことは考えない。

「それじゃ試合…開始！」

アインハルトさんは悠然と構えを取る。余裕ではなく、考え事をしながらだからだろう。

それでも、凄い威圧感…。

一体どれくらいどんな風に鍛えてきたんだろう。

勝てるなんて思わない、だけど、だからこそ一撃ずつで伝えなきゃ…

『この間はごめんなさい』と—————！！

先制しようとするけど、アインハルトさんの出だしの方が早く、右の拳の一撃を両腕をクロスして防御する羽目になってしまった。

危ない、もう少し遅かったら痛い一撃を喰らうことになっていた！

それでも、アインハルトさんの攻撃はまだ始まったばかり。

左のストレートを顔を後ろに下げて回避、次の右ストレートを左腕で流し、左フリッカーをしゃがんで避けて…

左足で踏み込んで懐に全力の一撃！

伝えるんだ私の全力、私の格闘戦技——！！
ストライクアーツ

アインハルトさんのお腹に拳をぶつけたものの、咄嗟に後ろに少し下がったので威力はそんなにない。

だから、これで切らずに追撃として前に踏み込み、左のストレートをぶつける。しかし、今度は両腕を交差する形でガードされ、反撃のチャンスを与えてしまった。

パンチのラッシュで畳み掛けられ防戦一方、一発を顔面に受けてしまう。

でも少し大振りで拳を構えたのが見え、右目が痛いのも我慢してクロスカウンターで右拳をアインハルトさんの顔面に向かって突き出す。

結果は、クリーンヒット。アインハルトさんの攻撃を紙一重で避けての一撃。

「やった!?!」

リオか誰かが言っていたのを気にせず、再び追撃に出る。

「はあああっ!」

左右のストレートをもう一度顔に向けて放つも、今度は手の甲を使って流す形で捌かれてしまう。

更に右側に隙が出来た事に気付くのが遅れて、右腕でガードするも、まともにガードした事で袖が吹き飛び、後ろに倒れそうになる。

それでも、コンクリートの地面に左手を付けてどうにか堪えて、蹴り上げでの反撃を試みる。

空振りに終わり、体勢を立て直すと胸元を殴られてしまう。

：間違いない、アインハルトさんのベルカ古流武術は手のみを使った武術。この前もそうだけど、足技がない。

というより、足は回避かあるいは、強力な一撃を生み出すための力場として使うということなのだろう。

なら一発一発の威力が高いのも、なかなか攻撃が当たらないのも頷ける。

でも私には、大好きで、大切に、守りたい人がいる。

小さな私に強さと勇気を教えてくれた

世界中の誰より幸せにしてくれた

大きな背中ですることの意味を示してくれた

：だから生きて強くなるって約束した

強くなるんだ、どこまでだって！！

「あああああっ！！」

右の拳に全力を込めて、拳の一撃を叩き込む！

その一撃は、アインハルトさんのナックルガードを破壊する。

でも…アインハルトさんの目は焦りどころか、何かに狙いを定めていた。

「霸王…」

アインハルトさんが地面を擦らせながら、足に力を溜め、その力を拳に伝えて打ち出す。

防御は、もう間に合わない。

「断空拳！！」

アインハルトさんの拳は私のお腹を捉える。

「かはっ！」

吹き飛ばされる寸前にアッパーを顎に当てるのが精一杯だった私は、廃倉庫のシャッターまで吹き飛ばされたところで意識を失った……。

ライルside

ヴィヴィオとアインハルトの試合の結果は、ヴィヴィオが手痛い一撃を喰らって気絶したことによる惜敗。

何故惜敗かというと、アインハルトがヴィヴィオをノックアウトする際に顎に一撃掠ったことで、今フラフラになっているからだ。

だが、ヴィヴィオが頑張った甲斐もあって、アインハルトが後に以前悔ったことを謝罪すると約束してくれた。つまりは、ヴィヴィオを認めてくれたということだ。

「マイスター、ケルディムから通信です。繋がりますか？」

「ああ、頼む。」

待機状態のサバーニャを左ポケットから取り出して翳すと、通信用のスクリーンが出て、兄さんの顔が映る。

「ライル、試合はどうなった？<

「ヴィヴィオが負けたけど、ヴィヴィオの目的は達成出来たぜ。なのは…嫁さんの状況は？」

兄さんは一瞬安堵するも、すぐに表情が強張る。

「>まだ産まれてない。もう4時間も経つつうのに…！<

少しだが、なのはの苦しそうな呻き声と、フェイトの「お願い、無事に済んで！」という祈りの声が聞こえる。

切迫した状況なのは明らかだ。

だが、俺にとっても家族が増える訳だから、無事に産まれて欲しい。

「とにかく、俺もヴィヴィオを連れてそっちに向かう。」

>分かった。それと、誰か連れてきてもいいが全員は駄目だ。なのはの家族も来ていて、大人数だと病院に迷惑を掛けちまうからな。<いつもの兄さんらしくない棘のある言い方だが、なのはのことで頭が一杯だと理解して敢えて言わなかった。俺だって同じ状況なら、余裕はないだろうしな。それに大人数で行くのはなのはと医者を集中力を削ぐことにもなりかねないということだろう。

「分かった、また後で。」

一言言って通信を切ると、全員が近付いてきた。

話を聞いていたのか、戸惑っている。

「なのはさんの出産が始まったんですか!?!」

スバルが心配そうに聞いてくる。

「そうだが…まだ産まれてないそうだ。これから俺はヴィヴィオを背負って病院へ向かう。誰か二人付いて来るか?」

「何で言って下さらなかったのですか?言って下されば伸ばしても良かったのに…。」

アインハルトが隠していたことに不服なのか、見上げながら眉を吊り上げる。

見下ろすのもおかしいので、座って話す事にする。

「ヴィヴィオとお前には試合に集中して欲しかったからだ。今日の試合はただの試合じゃなくて、互いを分かり合う為の試合だ。」

それに俺としてもこういうのも対話と言えるんじゃないかという発見があった。

今までスポーツは射撃で競うだけ、戦いは生きるか死ぬかと守れるかどうか、そして失うか失わないかの三つしか知らなかった俺にとって、ヴィヴィオとアインハルトの試合は新鮮で尊いものに映った。

「そう：ですね。無礼なことを言ってすみませんでした。」

理解したことを示して謝るアインハルト。

「分かってくれたならいいんだ。：それで、誰が付いて行く？」

俺が立ち上がって皆に聞くと、ウェンデイが手を挙げた。

「全員付いて行けないならチンク姉とスバルとティアナがいいッス。」

ウェンデイが提案を出すと、アインハルト以外全員が頷いた。

「そうだな。チンク姉はあたしらナンバーズ代表、スバルとティアナはなのはさんの教え子でニールさんの同僚だし。」

簡単に説明してくれたノーヴェ。なるほど、スバルとティアナはどっちにも関係あるのか。

が、いつまでも時間は掛けられない。

「分かった。ならすぐ行こう。兄さんから車を借りているから、乗って行こう。」

因みに使っている車は、なのはが使っている鮮やかなイエローの小型車。

名前は聞くのを忘れてた。

大人なら4人、子供なら5〜6人まで乗れて、小回りも利く。

「えっ、免許持ってませんよね？」

ティアナの疑問に答える為に、右ポケットから兄さんから預かった免許証を取り出す。

「それなら、持っているぜ。顔も似ているから大丈夫だろ。」

二年前の俺が聞いたら信じられないと言うだろうな。我ながら図太くなったものだ。

「はあ…本当は二人とも罰金と減点ものですが、今回は緊急なので大目に見ます。」

頭を抑えるもギリギリ納得してくれたティアナ。

「陛下をお願いします。でも…」

「陛下に何かあったら、ただではすみません。」

「あはは…オットーもディードも落ち着いて。」

「私達もいるから大丈夫だ。」

護衛としてお供したい気持ちを我慢して俺を脅…頼み込むオットーとディードを諫めるディエチとチンク。

「マイスター、いい加減行かないと…。」

「そうだな。…言うておくが、俺も兄さんと同じで車の運転は得意な方だ。だからその点は大丈夫だ。」

そう言ってヴィヴィオを負ぶって車を駐車した場所へと走って行く。

二一ルside

15..21

あれからすぐに聖王病院に連絡して救急車に来てもらい、俺もヴィータの計らいもあって愛車のランチア・ラリー037のレプリカモデルに乗って病院へ直行した。

当初から「お産が軽い」と言われていて、今回言われた通り比較的困難も少なく出産が迎えられる、つまりは薬を使わない自然な形で産むことが出来るとシャルマルから説明を受けた。

で今俺はあらゆる手術を成功させてきたゴッドハンドを持つ全身医ジェネラリストの院長先生がいると有名な聖王病院の産婦人科の奥にある手術室、その扉の前で右往左往している。

その扉の向こうでシャルマルが助手に入った医療チームがなのはと産まれてくる子供の為に奮闘している。

そのシャルマルに関しては、妊娠が発覚した頃から桃子さん共々なのはから色々相談を受けていたそうだ。そのため、今回のことに関しても主治医と言ってもいいぐらいに主に体調管理などで助言もしてくれたし、気を使ってくれた。しかし本来時空管理局の医務官の資格はあっても、出産に関しては専門外で立ち入ることは出来ないはずだった。

のだが本人は女性として産むことが出来ない自分の変わりにどうか現場に立ち会って無事に産ませたい一身で、俺たちが結婚してからクロノとカリム經由でこの病院の院長にお願いして医務官の仕事の合間を縫っては猛勉強していたらしい。そして今回院長の許可で助手として参加している。（この情報ははやてから聞いた）

それでも銃を持って戦うのと違う、自分の妻とこれから産まれる子供が無事で済むように信じて待つという願いと、何かあったらどうしようという不安、そして扉の向こうから感じるなのはの僅かな脳量子波が脳内を掻き回すことでそばにいたいという葛藤となり、俺の心を苛む。

簡単に言えば、落ち着かない。

「ニール、落ち着かないのは分かるけど、あまりウロウロしてないで座った方がいいよ？」

フェイトに注意されるが、今の俺にいつもの調子で返す余裕が無い。

「そう言われたってなあ、落ち着けるかよ！…来たのか、ライル。」

なのでいつもはみつともなくてやらない八つ当たりをしてしまう。

と、そこにライルがチンク、スバルとティアナと共にやって来た。その背にはヴィヴィオが試合に疲れたのか、眠っている。（実は気絶している）

「兄さん、まず座って落ち着け。」

ライルは士郎さんの隣にいる桃子さんに促され、負ぶっていたヴィヴィオを預ける。

なのはは母親に似ているから、すぐ気付いただろう。俺も初めて実家を訪ねた時、驚いたものだ。

「そうだぞニール。不安なのはニールだけじゃなくてなのはも同じ。いや、一番不安なのは、なのはなんだ。父親になるのに君が焦ってどうする！！」

士郎の親父さんの一喝で自分のみつともなさが無性に情けなくな
た。

確かにその通りだ。扉の向こうでなのは産みの苦しみの中で戦っ
ている。俺がじっと待たなくてどうする！

「…すみません、親父さん。」

士郎さんに謝り、なのはが今でも産みの苦しみに耐えて頑張ってい
る手術室の扉に目を向ける。

「…そういえば二ール、お腹の子の名前は考えたのか？」

数分ぐらい経ってから、突然チンクが聞いてきた。そして、質問の
内容を聞いた皆が俺に目を向ける。

「私もそのことが気になっていたが、決めているのかい？」

今言っているのか迷ったが、親父さんも聞いてきたため、答えるこ
とにした。

「既に決めています。男の子は刹那、女の子はラーナです。」

ライルは俺の意図に気付いたのか、苦笑混じりに呆れた顔をする。

「あいつの名前か…。兄さんらしい発想というか…。」

本当のことを言うと、男の子の名前にライル、ティエリア、小次郎

のどれか、女の子の名前はエイミー、このは、エールと候補があった。

アレルヤが入ってないのは、マイスターに選ばれた頃にアレルヤが何でコードネームじゃないのかを聞いた時、由来が自分に名前をくれた女の子の祈り：つまりはアレルヤの想い人の祈りだと言う事が分かり、何だかその名前を使うのは特別な意味を奪うことになる気がしたため、最初から除外した。小次郎は日本の名前で何故か響きを気に入って加えた。だが後に、強い意志で世界と向き合える人間になって欲しいという願いを込めて刹那に決めた。

エイミーは俺とライルの妹の名前。このはは、なのはの名前を一文字変えた名前ならどんなのがいいか考えた時に出た。そしてエールは、俺とライルの出身国のアイルランド語「?i re^{エアラ}」から由来するアイルランドの別名から来ている。一時期、このエールが国名になったこともある。

「二ール、まだラーナさんのことを引き摺っているの？」

フェイトが心配そうに聞いてくるが、首を横に振って否定する。

「それは違う。俺もなのはも、ラーナのように心が強く美しい子になって欲しいからその名前に決めたんだ。」

ラーナは、何があっても気丈に振舞い続けてきた。死ぬ間際でも、俺を気に掛けてくれた。

なのはも、そんなラーナを見ていた一人で、「見習いたい」と言っていたこともあった。

フェイトは納得したのか、微笑んで手術室の扉に目を向ける。

話を聞いていた皆も、聞くことがないのか、手術室の扉を見ている。

なのはside

「なのはちゃん、もう一度よ、ヒッヒッフー。」

私は今、今まで経験したことのない痛みと戦っていた。既に破水が起こり、いよいよ出産の時を迎えていた。

「うっ、ううっ…ヒッ、ヒッ、フー。」

シャルさんの指示通りに力を抜くものの、痛くて苦しくて気が狂いそうになる。

でもこの痛みは、自分の子供を産む為に受けているもの。お母さんも私を産む時に受けた痛み。

そして、産まれて来た後にニールや皆と一緒に色々教えたりするのがすごく楽しみ。

お姉ちゃんになるヴィヴィオがどんな顔で迎えてくれるのか楽しみ。

そして、この子たちが生まれてくる事が何より楽しみ！

だから、私は耐える。耐えて、産んでみせる！

「院長先生、赤ちゃんの頭が見えました…！」

シャルさんから状況が伝わる。まだもう一人いるけど、まずはこの子を…！

「もう少しだ、頑張ってくれ！」

「うっ、うううううううっ…！」

お腹が裂けるような痛みに耐える。汗も涙も出て、泣き叫びたいくらいにの気持ちに駆られるけど、ずっと苦しいときも負けない気持ちで日々頑張ってきたこと、ニールと子供たちとの未来を生きることがを思い出して痛みに耐える。

「よし、そのまま…そのまま出て来い…！」

「ううううう、あああああああああ…！！！！！」

おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ…。

「院長先生、一人目が生まれました！男の子です…！」

シャルさんが一人目が生まれたことを告げる。

「はあ、はあ、はあ…！」

でも、もう一人を産む為に、どうにか息を整える。

「高町さん、あともう一分張りですよ。シャマルさん、へその緒を切り取って。」

「はい！」

もう一踏ん張り、頑張ろう！！

二ールside

皆が黙っている中で、手術室から赤ん坊特有の元気な産声が聞こえてきた。

一人目が生まれたことが扉の向こうから現れた、違う脳量子波でも分かった。

「これが、命を生む、ということなのか…。私にも、もっと解る時が来るだろうか。」

後ろでチンクが驚きと憂いを以って呟く。

そうか、チンクたちはスカリエッティによって人工的に生まれて戦うために育ったから、命の尊さを実感出来ても、どうしても生むこと自体に関しては疎くなってしまうんだ。

そして、そのこと気付いたチンクは誰よりも気にしていた…ということか。

「来るわ、貴女にもいつかきつと実感する時が来る。」

そんなチンクの呟きを聞いていた桃子さんがチンクの両手を取って語る。

こういうことは、体験している母親が一番説得力がある。

命を奪って来た俺には、先ず語れないことだ。

「でも私は戦闘機人で…。」

「それは関係ないことよ。命を生むというのは、花を種から育てることだってそうだもの。花だって生きているんですから。」

桃子さんの言ったことを聞いて、何故かあのアザデイスタンの王女様を思い出した。結構刹那と会ったりしていたみたいだからなのだろうか。

「…ありがとうございます、えっと…。」

「高町桃子、桃子さんでいいわ、チンクちゃん。今、小学何年生なのかしら？」

いい雰囲気だったのが、突然の天然キラーパスでぶち壊しになった。

「…桃子さん、私はこれでも20歳なのですが…。」

項垂れるチンクに心の中で合掌する。

すると、赤ん坊の泣き声が二重奏を奏でるようになった。

扉が開き、中から手術服に身を包んだシャマルがマスクを取って笑顔を見せていた。

「おめでとうございます、無事に男の子と女の子の双子の赤ちゃんが元気に生まれました。二ールさん、中へ入って。」

「あ、ああ、分かった…。」

ガラにもなく緊張してガチガチな足取りで扉へと一步、また一步進む。

「二ール、士郎さんに言われたでしょ。ほら、行って。」

「そうだぜ兄さん。そんなに遅いと、なのはが待ちくたびれちゃうぜ?」

「ははっ、悪いな…フェイト、ライル。」

二人に背中を押されて手術室へと入っていく。

「まずは院長先生、シャマル、スタッフの皆さん、ありがとうございます。」

会う前に、まずはこの時の為に尽力してくれた医療スタッフたちに

頭を下げる。

「私達は大したことはしてません。本当はすごいのは、高町さんです。一言も弱音を吐かずに耐えたんですから、本当に強い精神力ですよ。ささ、奥さんとお子さんがお待ちしてます。」

院長先生に促されて進むと、床には羊水と血が所々で痕を残している。

これだけでも、いかに命懸けでなのはが産んだのか、いかに生きることが尊いのが解る。

複雑な面持ちになりそうなのを抑えて、今は家族のことを考えて、歩を進める。

そこで見たのは…なのはが片手でそれぞれ生まれた赤ちゃんを胸元で抱える姿だった。

その赤ちゃんは共に泣き疲れたのか、眠っている。

「二ール、私、頑張ったよ…。」

汗を掻いて疲弊している中で、気丈に笑顔を見せるのは。

そんな健気なのはを見て抱きしめたくなるが、負担を考えて我慢する。

「ほら、私達の子供だよ…。抱いてあげて。」

生まれたばかりの赤ちゃんを壊れ物を扱うように優しく抱き上げる。

「まさか、こうして自分の子供を抱き上げる日が来るなんて思わなかった。」

父さん、母さん、エイミー、ラーナ、見てるか？

俺たちの新しい家族が、ここにいる。ここにいるんだ。

「でも、今俺はここで生きていることを、この上なく嬉しく思う。」

「うん、私もだよ。」

ああ、何て幸せなんだろう。でも、この子たちにとってこの日こそが始まりなんだ。

「それで名前なんだが…決めた通りでいいだろう？」

「男の子は刹那、女の子はラーナ、だよね？」

だから、誓おう。

「ああ、そうだ。」

「じゃあ、よろしくね、刹那、ラーナ。」

なのはやヴィヴィオと同じように、この子達を大人になるまで守っていくと！日々の生活でも幸せにすると！！

「よろしくな、刹那、ラーナ。」

それもまた、生きることなんだ!!

ヴィヴィオside

赤ちゃんの泣き声みたいのが聞こえて目が覚めました。

「ん、んう…あれ、ここって病院？それに、何で桃子さんが？」

どうやら膝枕で寝かされているようです。

「ああ、ヴィヴィオちゃん、目が覚めた？」

桃子さんの膝枕から起き上がって辺りを見回すと、男性のお医者さんや患者さんが通っているので病院だと解りました。

「ヴィヴィオ、怪我とかはしてねえか？」

ライル叔父さんがしゃがんで心配そうに聞いてきました。

「大丈夫です。それで、アインハルトさんは…。」

「試合はあの娘が勝ったけど、お前のことを認めただぜ。」

ライルさんがサムズアップして試合は成功したことを教えてくれました。

「それと朗報だ。

ついさっき、ヴィヴィオの弟と妹が生まれたぜ！晴れてお姉ちゃん、そして俺は三人の叔父さんって訳だ。」

その言葉を聞いて、叔父さんが何で焦っていたのか合点がいきました。焦って当然だよな。

「そっか…私、お姉ちゃんになったんだ。……やったっ！」

病院の中なので、煩くならないように小声で喜びました。

「ヴィヴィオちゃん、もう少し待っていれば会えるからね。」

「はい。」

そうだ、ルーラーやリオ、コロナにアインハルトさん、ノーヴェたちにも写真撮って送ろう！

会うのがすごく楽しみ！あと、ニールパパやなのはママお医者さんとシャマル先生にもお礼言おう！

そして、産まれて来た赤ちゃんにもお礼言うの。

生まれてきてくれてありがとう、って。

アレルヤside

辺境自然保護地区 辺境自然保護隊訓練場

初代ロックオン…ニールに再会してから数日で怪我は治った。

超兵である僕とマリーは常人より回復も早く衰えにくいため、本調子になるのは半日運動するだけで事足りた。老化したら、流石に衰えが早いかもしれないけどね。

その間にアリオスが僕にリンカーコアという魔法を使うのに必要な核の検査をしてくれた。

ランクはC、魔導師としてはそれほど高くはないそうだ。ただし、飛ぶことが出来る。

また、魔法には攻撃は勿論、防御と捕縛に探索、補助に結界などがあるけど、僕が使えるのは攻撃と探索だけしか適性がないそうだ。他は出来ても簡単なものしか出来ない。

しかし、マリーがキャロというエリオのパートナーに魔法を簡単に教えてもらったところ、攻撃と捕縛と補助が得意だということが解った。

しかも、僕がアリオスを起動する際にマリーとユニゾンすることでハルートになることが出来る。

が、アリオスはあっさり成功したものの、ハルートはたった3秒で強制解除してしまっている有様だ。

原因は、僕とマリーがユニゾンする際にアリオスを展開した状態ではないといけないのだけど、その際に何故かアリオスに搭載され

ているGNドライヴが機能してくれず、形を保つ魔力が供給されずに不足してしまうことにある。

その原因を今アリオスが全機能を調べることに割いている。勿論、その状態では訓練に使うことは出来ない。

そのため、今僕は元の大きさに戻ったマリーと一緒にエリオが借りてきてくれた槍型の練習用デバイスを用いた模擬戦をしている。

「はっ！」

「当たるものか！」

マリー：いや、ソーマの刺突を左にステップして避け、そのまま片手でフォアハンドの形で横にスイングする。

「当たるものか！」

しかし、そこはしゃがんで避けられる。

「アレルヤさん、マリーさん！」

と空からキャロが大きくなった白い竜のフリードに乗ってやって来たため、僕は訓練中にも関わらず見上げてた。

僕はそれをすぐ後悔することになる。

「…あ。」

ティーン

という擬音が一瞬、僕の股間から聞こえた気がした。

「…………アkグtんどhtydfjd、ずmbhんrycべい!!」

あまりの痛さに芝生で出来た地面に倒れ転げ、言葉にならない声を股間を叫ぶ。

「い、ごめんなさ——————い!!」

何とか股間の痛みが治まった。いくら超兵でも強化出来ないんだよね。いや、男なら誰でも出来ない。

「おいマリー、俺の息子が使えなくなったらどうすんだ!これじゃ夜に…げふっ!」

ハレルヤがマリーに文句を言うと言ってとんでもない事を言ってマリーからボディブローを受ける。

当然、その痛みは僕も受けることになる。恨むよ、ハレルヤ。

「子供の前で何てこと言うのよ!」

「ご、ごめん…マリー。でも、流石にボディブローは勘弁して欲しかったかな。」

「あ、あははは…ご、ごめんねアレルヤ。」

苦笑しながら謝罪するマリーを他所に、キャロは怪訝そうにハレルヤの発言のことを考えていた。

「エリオくん、ハレルヤさんは何のことを息子って言ったのかな?」

キャロの質問にエリオは引き攣った笑みを浮かべるしかなかった。

僕もその気持ち解るよ、エリオ。ハレルヤのせいで何度刹那やフェルトの疑問に答えを詰まらせることがあったことか…。

「さ、さあ、僕にも解らないよ。あはははは…。」

「ふ…ん…。」

納得してないのか、ジト目でエリオを見るキャロ。この分だと他の人にも聞くつもりだろう。

って話が逸れている!

「それでキャロ、僕たちを呼んだのはどうして?」

「あつ、そうでした！ 実は大事な話があるんです。」

「大事な話って何かしら？」

僕たちを代表してマリーがキャロに尋ねる。

「実は……」

二一ルさんとなのはさんの双子の赤ちゃんが生まれたんです！」

ロックスオンの赤ちゃんが…生まれた！？

「えっ、えっ……ええええええええええええええええええええええ！」

？」

人生でおそらく、一番叫んだ瞬間だった。

テイエリア Side

アルピーノ家に居候するようになってから一週間が経った。

僕の仕事は主に露天風呂の掃除、ガリユー同伴の山菜探しとキノコ採り、一日だけが料理も振る舞った。

料理はロックオンとアレルヤにサバイバルの一環として教えてもらったことがある。その時にビーカーを使っていたが、今思えば少し

恥ずかしい。

で今は夕飯の支度をアルピーノの親子と共に行っている。

「しかしルーテシア、君には本当に驚かされる。魔法について教えてもらったこともそうだが、それ以上に君は建築に関してプロとしてやっていける才能がある。」

他人を正直に褒めるのは珍しいと自分でつい思ってしまう。

「ふふん、凄いでしょっ!」

胸を張ってエッヘンと言わんばかりに自慢気にするルーテシア。だが、僕自身も自慢するのは納得出来る。

設備の設計図を見せてもらったが、明らかにプロと言えるぐらい精密で非の打ち所がない構造になるような設計が為されているのだ。

耐震、耐火に優れ、更にそれぞれの部屋に移動する経路も分かりやすく、しかし地形を考えて理に適ったものになっている。

正に使う人のニーズを考えて造られたと言ってもいいだろう。

「あら、どうしたのヴィヴィオ。いつになくソワソワしてるわよ?」

>うん、あのねルールー実は…なのはママの子供が無事に生まれま
した!!!<

「そうなんだ、なのはさんが出産…ええ!?!」

>しかも双子でね、ニールパパなんか泣き出しちゃって…もう私もすごく嬉しくて試合の疲れが吹き飛んじやった！<

「あはははは！おめでとうヴィヴィオ、これでお姉ちゃんだね！！」

>うん、ありがとうルールー。今から写真送るね！<

ルーテシアが送られた画像を見る。思わず気になり、僕もその写真を見たら…

「うわあ、何だか会うのがすごく楽しみになってきた！赤ちゃん、可愛いなあ…。」

そこには、ロックオン・ストラトス、ニール・ディランディが亜麻色の髪の小学生ぐらいの女の子と共に生まれたばかりだろう赤ん坊を嬉しそうに抱きかかえ、そのすぐ後ろには、ベッドで寝ながら笑顔でカメラに視線を送る茶髪の女性が映っている。

生きていて欲しかったのに願ひ叶わず、永遠に別れるはずだった人がそこにいた。

「ま、まさか…生きて…いた…うっうっ、ロック…オン…！」

あまりに突然のことに心の中で混乱が治まらない。ルーテシアが驚いた表情で、後ろにいる僕の方を向く。

「へっ、ちょっと、突然泣いてどうしたのティエリア！？」

ソレスタルビーイングが敗れて以来、流すことのなかった涙が今、頬を伝って流れていた。

.

第5話 覇王に届け、私の想い！そして、生まれ来る新たな命（後書き）

内容を見ての通り、特に苦勞したのは出産のシーンです。

これはwiki prdiaやドラマのシーンをどうにか思い出して書いたもので、直接見ていない私にはこれが限界です。

念のために言いますが、今回の内容には世の親御さんには配慮したつもりです。

ですが、知識も無く、どう気を付けても穴は出てしまっているだろうと思っています。当然、批評も受け付けますし、今回の出産のシーンに限っては誹謗中傷も甘んじて受けます。

おかしいところがあったら後書きやメッセージなどで言うてくださいますと助かります。時間を見つけて修正します。

第6話 覇王VS深緑の銃撃士（ガンナー）（前書き）

約3ヶ月ぶり、前より酷い…。

本当にお待たせしてすいませんでした。

8、9月は忙しかったのですが、10月は詰まっただけです。

第6話 覇王VS深緑の銃撃士（ガンナー）

―なのはside

双子が生まれてから三日後に退院し、自宅で二週間は静養と共に子育て。家事は、毎日時間に都合を着けられるチンク以外のナンバーズの皆を中心に変わりばんこに来て手伝うことになりました。

ただし料理は、ニールとライルさんとフェイトちゃん、たまにセインとシャルさんがやっています。皆上手いのですが、シャルさんは上達してなくて……お世辞でも上手いとは言えません。でも厚意でやってくれているので流石に断れませんし、調理中におかしな味付けをしないように誘導してます。…案の定、お菓子のカップケーキを作る時に本来肉料理に使うはずのナツメグを入れようとしてました…。

JS事件の時は、二週間の安静の後に完治する前に仕事復帰していたけど、退院前に同じ事をしようとしたらニールやフェイトちゃんとシャルさんどころか、ヴィヴィオに両親、偶然お見舞いに来ていて聞いていたリンディさんにまで怒られました。

特にお母さんとリンディさんには、子育てに集中してもらおう為に一年間仕事復帰は禁止と釘を刺されました。お母さんとリンディさんにあそこまで厳しく言われたのは初めてかも…。

でも、お母さんが私を産んだ頃にお父さんを頼れず片時も離れることなんて出来かったことを話して、どっちにしても無茶が過ぎる復

帰計画だったかなと反省しました。

実際昨日も片時も離れてません。

でも双子の笑っている顔を見ると疲れなんて吹き飛びます。ヴィヴィオもそうだけど、自分の子供の笑顔を見ると癒されるんだよね。

「ママ、刹那が泣いてるよ!？」

ふと最近のことを掃き掃除をしながら思い返していたら、リビングで面倒を見ていたヴィヴィオが玄関を出てベビー刹那が泣いていることを教えてきました。

「おぎゃあ、おぎゃあ、おぎゃあ…!」

「今行くね!」

今日もまた双子に追われる一日になりそうだ。

ヴィヴィオside

刹那とラーナが生まれて、私はお姉ちゃんになりました。

最初はどうしたらいいのか全然分からなくて戸惑ったけど、今は抱っこやオムツの交換、ミルクをあげたりすることも出来ます。

で今何をしているかと言いますと、朝のジョギングを終えて戻ってきたら双子が泣いていたのでなのはママに教えたところです。

「おう、ヴィヴィオお帰り！」

「んぐ、んぐ、ふう……ようヴィヴィオ、邪魔してるぜ。」

「お帰りヴィヴィオ。もう少しで出来るから今のうちにシャワー浴びてきたら？」

テーブルに座って新聞を読む教導官の制服姿のパパ、パパの隣で水を一気に飲みほしたジャージ姿のライル叔父さん、そして両手で色とりどりの野菜のサラダの入ったボウルを運ぶフェイトママがおはようの挨拶をします。

「ただいま。そうするね、フェイトママ。」

フェイトママに促されて、バスルームへ。予め用意した着替えを確認して着ていたジャージを脱いで程好い温かさのシャワーを頭から浴びる。

「うーん、気持ち良い！」

次第に汗でべとついた体が流れて気分爽快！

今日もアインハルトさんに会ったら何を話そう？アインハルトさんは物静かであり喋ったりはしませんけど、さりげなく入る校舎を間違えているのを教えてくれたりなど気遣ってくれるところもあります。

でも、まだ一緒に練習出来てないし、話とは言ってもまだそんなに色々話した訳じゃないし…。

「いけない、気持ちが沈んじゃ！まだ始まったばかりなんだ、頑張ろう！！」

格闘技も、アインハルトさんとの付き合いも、そして…双子のお姉ちゃんとしても！！

二ーl s i d e

双子が生まれて、晴れて俺の家族が増えてから17日経った。

あれから俺もなのはとヴィヴィオと一緒に子育て……とはいかず、教導官としての仕事を中心の毎日に戻っていた。それに加えて、毎年行っている無人世界カルナージにあるアルピーノ家での『オフトレを兼ねた異世界旅行』をルーテシアと話し合ったり、他のガンダムマイスター……つまりは刹那をそれとなくではあるが探したりしている。それでも休みが出来た時はなのはと一緒に面倒を見ている。

ティエリアについては二週間前にルーテシアがさらっと…

「そういえば、私の家に最近ティエリアという人が居候していて、二ーlさんを見て号泣していたわ。」

と言ったことであっさりと分かってしまった。

今会いたいかどうかと聞かれたが、旅行で時間が空いた時にでも話す方が良さだろうということで断った。ルーテシアたちのところにいるのなら焦ることも無い。

だが、それよりも新たに俺を悩ませることがある。

それは……

DSA公式戦『インターミドル』の主催者側から、女子の都市本戦優勝者と対戦して欲しいと依頼されたことだ。つまりは都市本戦優勝者に優勝商品として俺と試合で勝負する権利が与えられるということだ。

正直、俺の戦い方は競技用ではないため、気が進まない。ただ、サーシエスを倒した俺の強さに憧れている子も多いらしく、そういった子たちの願いを叶えたいという思惑も大会を盛り上げることも絡めて頼んできている。

なので、未だに結論を出せずに悩んでいる。

「どうしたの、二ール？ 考え事？」

ふと、新聞を読んでいたようで読んでいなかった目をフェイトに向ける。ヴィヴィオはシャワーを浴びているが、なのはも双子の赤ん坊の面倒を看ている。

「ん？ ああ、考えていた。考えていたが、少し話が長くなるし、今なのは双子を看っていて落ち着いて話出来ねえし、旅行の時に話す。」

「うん、分かった。忘れないでよ？」

「大丈夫だぜフェイト。俺が覚えている。」

ウインクをフェイトに向けて放つライル。

「ライルには聞いてないよ、ふんだっ！」

頬を膨らませてそっぽを向くフェイト。何故か頬が少し赤い。

「あらら、振られちゃった。」

おどけるライルだが、一体フェイトと何があったんだ？だが今詮索するのも無粋に思えたので止める。

「ん、もうこんな時間か。今日は特殊武装隊の教導が入っているから早く行かねえと。なのは、ヴィヴィオ、先に出るぞ。」

因みに俺がこれから教導する特殊武装隊とは、俺のケルディムが提供したデータとスカリエッティの研究所から得られたデータを元に作成された全身装備型デバイス『MG-X』^{マギックス}を試験運用する部隊のことだ。結成されたのはつい先月で、各部署で魔力ランクがCぐらゐと低い魔導士を中心に構成している。その中には、自分から希望して入隊したヴァイスも入っている。

全身装備型デバイス^{メイル}にはセットアップ時にデバイス内に造られた別空間に本体を移し、手足を壊されようが装甲を破壊されようが本体そのものには影響はないとケルディムと類似点が多い。

違いは、擬似MGドライブで展開時に魔力ランクが1段階しか変化しないこと、GN粒子は魔力との結びつきが良く、GN粒子を魔力に変換することも出来たが、擬似GN粒子の場合は魔力との結びつきがそれ程良くなく、魔力が高いと擬似GN粒子と魔力とで反発し合って爆発を引き起こす。スカリエッティはその辺りをどうにかしたらしいが、残念ながらラボのデータは残されてないため、自力で探すしかない。その為に、運用出来る魔導師の2倍消費するため運用するには最高Aランクまでとなってしまう。これでは使い勝手が悪い。しかしバリアジャケットより頑丈で生存確率が非常に高いため、主な任務はバリアジャケットでは行けない火山や氷河、宇宙など過酷な環境が多くなる予定だ。

実験運用は当然俺で、現在はバリエーションを加えたMG-X？の試験運用中だ。ヴァイスは、MG-X？の武装バリエーションの一部に俺が使っていたGNスナイパーライフルを参考にストームレイダーを改造して運用している。

「あつ、待って。」

玄関から外に出ようとした俺にベビー刹那を抱いたのはが歩いてくる。

「行ってらっしゃい、ヴァイス君によろしく伝えてね。」

いつものように笑顔で送るなのは。

「あ〜う〜。」

そしてまるでなのはの真似をするかのように笑いながら声を出すベビー刹那。

ベビーラーナがいないのは、まだ寝ているからだろう。ラーナに似て寝ぼすけだからな。

「ほら、刹那もパパ行ってらっしゃいって。」

抱えながら刹那が手を振るように動かすなのは。何とも微笑ましく、心温まる。

「ははっ、行ってくる!」

今日も、日常が始まる。

アインハルトside

08..26

ヴィヴィオさんとの試合から二週間が経ちました。

現在、初等科、中等科共に一学期前期試験の真っ最中です。当然私も勉強に集中しなければなりませんのでトレーニングを1時間だけに控えて、残りの時間は机に向かっています。

今日は数日間続いた試験最後の日で、登校途中です。

突然通信が入り、木の傍へ寄って繋いだら、ノーヴェさんでした。

>よう。今、大丈夫か?<

「はい、少しなら大丈夫です。」

「よし、なら単刀直入に言うぜ。次の週末にトレーニングを兼ねた合宿があるから来ないか？」

合宿とは言っても、きっとそんなに大したことはしないでしょう。

「合宿…ですか？すみません、私は練習がありますので。」

「だからその練習の為にいくんだって。あたしや姉貴もいるし、ヴィヴィオも来る。練習相手には事欠かねー、しかも魔導士ランクAからオーバーSのトレーニングも見られる。」

「…前言撤回、非常に興味があります。我ながら現金だと思いますが、それを聞いた以上は参加したいです。それに、ヴィヴィオのお父さんも参加するかもしれませんし…。」

「はい…。」

「ついでに歴史に詳しくて、お前の祖国のレアな伝記本とか持っているお嬢もいる。まあたったの四日だ、騙されたと思って来てみるって。つまんなかったら走りこむなり一人で練習するなりしていいんだし。」

ですが、関係がない私がお邪魔して迷惑にならないでしょうか？

「あの…」

「いいから来い！絶対いい経験になる！」

思ったことを言おうとしたら、笑顔でサムズアップして来るようにアピールする。

選択肢がありません。

「後で詳しいことメールすつから、とりあえず今日の試験頑張れな！」

「…はい……。」

ノーヴェさんは言うだけ言って通信を切ってしまいました。

どうやら私が行くのは決定事項のようです。

でも……

今逃すと二度と出来ない経験かもしれないし、参加しよう！

そうしてさっきの合宿について決めて、時計を見ると既に5分も経っていました。

「いけない、遅刻してしまい……へぶっ！」

慌てて駆け出そうとしたら、何か固いものを踏みつける感触を感じ、滑って転んでしまいました。

「うう……あれは、デバイスでしょうか？」

私が踏んだところには、白をメインに黒と紫の縁取りされたカードが落ちていた。真ん中には淡い緑色魔力らしきものが丸いレンズで光輝いている。……いや、いつか見たニール・ディランディVSアリー・アル・サーシエスの映像（一般のカメラマンが撮った動画で戦いが空高くだったためにあまり細かく見れなかった）でガンダムになったニール・ディランディから放出されていた粒子の色に似ているため、魔力じゃないかもしれない。

> 漸く気付いてくれるかと思ったら踏まれるとは思いませんでした。
<

……どうやら、インテリジェントデバイスだったようですね。

「い、ごめんなさい。今拭きます。」

土塗れになってしまったカード型デバイスを手提げバッグからハンカチを取り出して拭いていく。

ハンカチは帰った後に洗濯しましょう。

デバイスに付いた土を拭き取った後、歩いては間に合わないぐらいに時間が過ぎていたため、デバイスを持ちながら走っています。

「はっ、はっ、貴方の名前は、何て言うんですか？」

> 私はラファエル。正式にはラファエルガンダムと言います。<

……ガンダム！？と驚いて思わず凝視してしまったために、喫茶店の鉢植えに気付くのが遅れて足を掛けそうになるも、ジャンプしてやり過ぎします。ただ急いでいたため、スカートが捲れてしまいました。ちよつと恥ずかしいです……。

「はっ、はっ、ではニール・ディランディや、そのガンダムは知っていますか？」

>はい、デュナメスですね？<

「ひっひっふう、いえ、デュナメスとケルディムです。」

因みに、これは通り掛りの管理局員に聞いたら出て来た情報です。

>変ですね。ケルディムはロックオン・ストラトスを名乗るようになったライル・ディランディが乗っていた機体のはずですが。<

ライル・ディランディ……ライルさんがガンダムに乗っていた？ガンダムはデバイスで身に纏うバリアジャケットではないのでしょうか？

>でも、今は急いでいるのですよね？でしたら、続きは用事が済んだ後にしましょう。<

ラファエルの言葉に無言で頷いて、ラファエルをバッグに仕舞います。

疑問は後で聞きましょう、今は試験です！！

放課後

朝の登校とは違い、ゆっくり歩いて帰宅してます。

「では、朝の続きですが、ライルさんがニール……さんの弟というのは聞きました。では、貴方は何故ケルディムはニールさんではなくライルさんが乗っていると言ったのですか？」

＞答えは簡単です。彼は……

本来なら既に戦死していたのです。＜

戦死……！？なら、彼らは戦争をしていたということでしょうか？

＞ニール・ディランディは家族を殺したテロ組織の元リーダー、アリー・アル・サーシェスとの一騎討ちで相討ちとなり果てました。彼の亡き後に組織は敗北、4年の建て直しを経てライル・ディランディがスカウトされました。彼はここに来るまで激しい戦いの真最中でした。＜

私が知っている彼の経歴とここまで食い違っているということは……

「貴方が言っているのは、ここに来る前の彼……ということでしょうか？」

＞その通りです。……ニール・ディランディは生きているのですか？＜

ラファエルはさっき家族を殺されたと言っていました。

つまりは、二ールさんもライルさんも、戦いも失うことの悲しみも知っているということ……。そして、二ールさんが強いことは勿論、ライルさんも戦いを勝ち残れるぐらい強いということになります。

なら、私はライルさんを侮りすぎたということになるのかもしれない。

「はい、彼は生きてます。」

別のことを考えながらも首肯する。

ライルさんを侮っていたとそう思ったら、ライルさんの実力をもう一度確かめなければならぬという衝動に駆られてヴィヴィオさんの家に来ました。前にここに居候していると聞いたのでここにいます。それに、ヴィヴィオさんから二週間前の試合をしていた時にヴィヴィオさんのお母様が出産をしていたそうで、ライルさんがそわそわしていたのもそれが原因だったと聞きました。大いに気を遣わせてしまったため、私としても挨拶が出来ればと思っていたので僥倖です。

「ライルさんいるでしょうか？」

ピンポンというインターホンを鳴らす。

「はい。あれ、君はもしかして、アインハルトちゃん？」

出てきたのは、亜麻色の髪を左にサイドポニーで縛ったエプロンの

似合う女性でした。

この方が、ヴィヴィオのお母様。

「初めまして、アインハルト・ストラトスです。二週間前のヴィヴィオさんとの試合の際、お子様が生まれたと聞いて訪ねさせていただきました。おめでとうございます。」

ライルさんと会うことも目的の一つですが、先に挨拶と祝いの言葉を言わないと失礼になってしまいますので忘れずに挨拶しました。

「わざわざありがとうございます。私はヴィヴィオの母の高町なのはです。娘がいつもお世話になってます。でも、用はそれだけじゃないよね？」

「はい、あの……。」

「割り込みすいません。マスター、彼女からデバイスの反応があります。デバイスは持っていないかったと聞いているのですが説明していただけますか？」

ヴィヴィオのお母さん……なのはさんの後ろから彼女のデバイスらしき赤く丸い宝石がピンクの光の翼を生やして浮遊しています。自分で言う前に言われてしまいました……。

「はい。実は今日登校中にデバイスを拾ったのですが、どうもニールさんとライルさんを知っているようなのです。お二人のどちらかに会いたいのですが、どちらかいらっしゃいますか？」

鞆からラファエルを取り出して差し出します。

「レイジングハート、これってもしかして……。」

「間違いありません、デバイス内に流れるエネルギーはGN粒子です。」

「初めまして、ラファエルガンダムと申します。ラファエルとお呼び下さい。」

「うん、分かったよラファエル。それでアインハルトちゃん、申し訳ないんだけど二人とも今いないの。ニールは仕事で、ライルは隣のフェイトちゃんに居候しているの。でももしかしたら、ライルはいるかもしれないよ?」

慣れているのか、ラファエルに大して驚きもせずに説明してくれました。

「「おぎゃあ、おぎゃあ!!」」

すると、奥の部屋から赤ちゃんが交互に泣く声が聞こえました。

「あれ、もしかしてミルクの時間かな? ごめんね、アインハルトちゃん。待ってて、刹那、ラーナ!」

もてなしが出来ないことを謝るなのはさん。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます、そして邪魔しました。」

頭を下げて、ヴィヴィオさんの家を後にして、隣へと向かいます。

隣の家……フェイトさんというなのはさんの友達の家玄関にやってきた私。ヴィヴィオさんの家と同じくらいの大きさで庭の花壇に咲く黄色の花が綺麗です。残念ながら、あまり花に詳しくないので名前は分かりません。

インターホンを鳴らそうとしてスイッチを押そうとした瞬間……

ドンッ！！

「ふあうっ！?!?」

ドアが勢いよく開き、額を打ってしまいました。

「ううっ……。」

あまりの痛さに額を抑えて蹲ります。

「なっ、大丈夫か……ってアインハルト!?!」

ドアを開けた人物はライルさんでした。

「あちゃあ、おでこぶつけたのか……。とりあえず、冷やすもの持ってくるから玄関で座って待っててくれ。」

頷いて、玄関の段差に腰を降ろして待つことにします。

……何だかライルさんと会う度に何か起こっている気がします。

少し待った後、保冷剤をタオルで包んだものを持ってきたライルさん。私は受け取ってすぐに額を冷やす。ひんやりした感触が少し心地良いです。

「いやあ、悪かったな。少し出掛けようと思っていたんだが、まさかアインハルトがここに来るとは思わなかったんだ。」

「いえ、不注意だったのは私も同じなので気にしないで下さい。」

言われて、逆に自分の迂闊さに少し恥ずかしくなってきました……。

「ここじゃ難だから上がって話すか？」

「はい、お邪魔します。」

額に簡易的なアイシングを当てながら靴を脱いでライルさんが予め置いてくれた虎なのか猫なのか分からない顔の形に出来ているスリッパを履いて上がります。

廊下を少し歩くと、ソファアールと角が丸い四角のテーブルが置かれている居間に着きました。

「まあ、座ってくれ。」

そう言ってライルさんが私に促すように先に座ります。

「では失礼して……あの、これは？」

座ってみたら、破かれた感じで雑誌の紙片が何枚か散らばっていました。

手にとって何なのか気になって見てみたくなりました。

「待て、それは……！！」

ライルさんが慌てて取り上げようとするも、私の好奇心が勝って取り上げようとする手を避けます。

「！？！？！？！？！？！？」

肝心の紙片を見るとそこには……女の人の……乳首が、モノクロで描かれてました。

「はあああああ……。」

見られたショックなのか、脱力して項垂れるライルさんですが、私は今、さっきの恥ずかしさも相まって頭の中が沸騰しそうです。

「ああああああの、こここここの紙片は……。」

「……エロ雑誌の、だ。昨日フェイトにこっそり買っていたのがバレて破かれた……。」

渋々自白するライルさんから、哀愁が漂っているように感じます。というより泣いています。

何だかラファエルのことを聞いたり挑戦しに来たのに、追い詰めて来ている感じになってしまいこっちが居た堪れなくなってきました。

「マスター、ここに来てからアインハルトが絡むと何かと起ききますよね。もしかして狙っているのですか？」

「んな訳ねえだろ……！子供は守備範囲外だつての。」

テーブルに置かれた緑色のキーホルダーに睨むライルさん。

でも、そう言われると複雑です。

「とマスターのことは置いて。アインハルト、貴女のバッグからGN粒子の反応があるのは何故ですか？」

ライルさんのデバイス、サバーニヤに聞かれて、沸騰したり沈んだりと混乱している意識を無理やり戻してラファエルを取り出します。

「お久しぶり……いえ、初めましてと言うべきでしょうかサバーニヤ。」

「まさか、ティエリアの……！」

先程の様子とはうって変わって驚くライルさん。

「はい、ラファエルガンダムです。」

「今日、登校中に木の傍に落ちていたのを拾いました。」

「兄さんからティエリアが見つかったって聞いたのにデバイスがな
いと思ったから変だと思っていたが、まさか道端に落ちていたなん
てな。」

「私も何故マスターと一緒になかったのか不思議でなりません。」

「……まあ、そこは今考えても仕方が無いから追々話そう。コーヒ
ーと紅茶、どっちがいい？」

ライルさんが立って、キッチンへ向かう。

「では、紅茶で。」

「オーライ。」

お茶を用意したライルさんが戻ってきて座ったところでお話は再会
しました。

「それで、ラファエル。ティエリアのことも知りたいだろうから教
えておく。兄さんが言うには、今カルナージという惑星で厄介に
なっているそうだ。」

「ということは、ノーヴェさんが言っていた合宿で泊まる場所に
いるということですね。」

これはなおこと、行くべきですね。

「ノーヴェからもう聞いていたのか。俺も皆から誘われているし参加するつもりだ。」

「そうですか。なら、何も焦ることはありませんね。」

どうやらラファエルの心配事は解決したようですね。

「これで二ール、マスター、アレルヤ、ティエリアとガンダムマイスターがほとんど集合した訳ですね。」

「あとは刹那だけだが、あいつはクアンタで旅しているだろうからそのうち自力でここに来るんじゃないかねえか？」

「じ……自力、ですか？」

飛躍した話に開いた口が塞がりません。ライルさんたちは、どこから来たのかまだ知りませんが、少なくとも自力で来るなんて時空航行でも出来ない限り不可能だということは解ります。

「ですが、そればかりは保障できませんよ？そもそも製作したイアン・ヴァステイをして能力も未知数と言わしめた機体なのですから。」

それは逆に言うなら来ないという保証も無いということになります。刹那さんという人は本当に何者なのでしょうか？

「あの……その刹那さんの実力は一体どのくらいなのでしょうか？」

「そうだな……。魔導士で言うならSランク以上は固い。少なくとも、俺は接近戦になったらあいつに勝てる気がしねえな。それに、実戦経験も豊富、剣も使うからアインハルトは相性悪いんじゃないのか？」

確かに実力がライルさんの言った通りなら、間合いを詰めることが出来なければ一方的にやられるでしょう。

「それに、ダブルオーライザーの戦闘記録にはサーシェスを圧倒した記録も残っていますし。」

あのアリー・アル・サーシェスを圧倒！？もう私の想像を超えています……。来るのであれば、是非一手お相手していただきたいところです。

ですがまずは……

「刹那のことが気になるのか？」

茶化すようにニヤニヤするライルさんですが、今は意に介しません。

「はい、気になります。ですが、今はライルさんが気になります。」

「おっと、俺をご指名か。」

予想外だったのか、ちょっとだけ驚いた顔をするライルさん。

「マスターはホストですか？」

「サバーニヤ黙っててくれ……。それでアインハルト、合宿で時間

作ってでも出来るんじゃないのか？」

「いえ、すぐの方がいいです。」

合宿はどうなるか分かりませんし。

「じゃあ、ノーヴェに聞いてみるか。サバーニヤ、繋いでくれ。」

「了解。」

数秒経って、回線が開き、モニターにノーヴェさんの顔が映る。

「あれ、ライルさんどうしました？」

ライルさんに手招きされて隣に移動します。

「実はアインハルトが俺と試合をしたいらしいんだが、前借りたところは借りられないか？今日が無理なら明日でもいい。」

「そうですね……今日は救助隊が使ってますから無理です。でも明日なら使えますよ。許可はもらっておきます。」

「そっか。悪いな、急に頼んじゃって。」

「このくらい大丈夫ですよ。でも、明日はバイトが入っているので立会いは他の奴に頼みます。」

私の発言でライルさんの皆さんとの関係を悪くしたかもしれないと

心配してましたが、杞憂だったようで安心しました。

「じゃあ、誰になるかも後で教えてくれ。」

>はい……つう訳で悪いなアインハルト。今日は出来ねえから我慢してくれ。でも、週末の合宿もあるからあまり無茶するなよ！<

釘を刺されましたが、私も合宿に怪我で行けないというのは嫌です。

「いえ、大丈夫です。頼みを聞いて下さりありがとうございます。」

>おう。<

通信を切り、ライルさんから離れます。

「そういう訳だ、今日は帰った方がいい。ラファエルはどうする？」

「私はマスターに再会するまでアインハルトと共にいます。」

「ではしばらくよろしくお願いします。ではライルさん、お邪魔しました。」

「おう、また明日な。気を付けて帰れよ。」

挨拶をしてフェイトさんの家を後にして、自分の家へ向かいます。

ライル side

翌日

15..32

以前ヴィヴィオとアインハルトが分かり合うための試合をした場所。今度は俺がアインハルトの挑戦を受けて試合を行うことになった。

でノーヴェの変わりりは、ウエンディが行うことになった。唯一暇だったそうだが……ジャッジ出来るのか不安だ。それに……

「ライちん、今失礼なこと考えていたツスね？」

「さあな。ところでよ……何でヴィヴィオたちもいるんだ？ノーヴェに頼まれたオットーとデードならともかく。」

そう、誰から聞いたのかヴィヴィオたちも俺たちの試合を観に来ていた。オットーは結界を張って魔法で施設を壊さないため、デードは吹き飛ばされるなど非常時のカバーとして来ている。

「だって、ライルさんもガンダムになれるんでしょ？どんなのか観てみたいんです！」

目を輝かせるリオ。

「アインハルトさんとライルさんが試合するって聞いてつい、気になってしまっ……。」

少し申し訳なさそうに、でも好奇心が抑えられないことを話すコロナ。

「ねえ、いいでしょライルおじさん。ワクワク。」

そして、明らかにワクワクしながら俺を見上げるヴィヴィオ。

見世物じゃないんだが、まあいいか。隠していた訳じゃねえし。

「分かった分かった。でも危ないから下がっているよ。」

「「「はーい！」」」

俺の言うことを聞いて離れる三人。

「おっほん。えっと、ここは以前にヴィヴィオとアインハルトが試合やっている場所なのは知ってるのですが、今回ライち……ライルさんは魔法を覚えてから一ヶ月も経ってないため、魔法を使用出来ません。なのでアインハルトも魔法を使用できません。ただしオートに結界で張ってもらっています、あまり威力の高い魔法には耐えられません。なので砲撃魔法とトランザムは禁止です。」

結界破壊しちまったら意味ないもんな。それとウェンディ……

「手に持っているメモはノーヴェから渡されたものだろ。」

俺に指摘されたウェンディの顔が真っ赤になる。凶星突かれて恥ずかしくなったか、可愛いな。

「……制限時間は5分、どちらかダウンした時点で勝負ありッス。」

「全力で行きます。」

おっと、おふざけはここまで。ここからは、真剣勝負だ！！

「ああ、行くぜサバーニャ！」

「デュナメスリペアとサバーニャ、どちらで行きますか？」

「サバーニャだ。ただし武装はピストルビット2丁、ホルスタービットは無しだ。」

フィールドが狭く、アインハルトは動きが速いから、ホルスタービットは邪魔になるし、ライフルビットでは接近戦に対応しきれない。

「了解。GUNDAMフォームへ移行します。」

指示を出した瞬間、俺は魔力とGN粒子の混じったライトグリーン
の空間に包まれ、一瞬のうちに全身に装甲が張り巡らされていく感
覚になる。ただし、これは異空間に移された俺の本体が装甲と感覚
を共有しているだけである。装甲を吹き飛ばされたり、強力な攻撃
を受けない限りは痛覚を感じない仕組みだ。とはいえ、頭部を破壊
されたらGUNDAMフォームを強制解除されてしまうため、気を
付けないといけない。

空間から出て、自分の手を確認する。

機械の手にピストルビットが予め持たされている。手、足、胴体
にはマイクロミサイルコンテナが装備。頭部にはロックオン・スト
ラの機体特有のV字に近いアンテナとその真ん中にクリスタル製
のカバーに覆われた狙撃とマルチロック用のガンカメラが付いてい

る。

「これがライルさんの、ガンダム！」

ギャラリーでは一度見せたヴィヴィオ以外全員、向かい側では大人の姿になったアインハルトも驚きの表情で見っていた。

今のアインハルトの身長は、俺の胸ぐらいまであり、俺を見上げる。

「両方とも準備出来たという訳で、試合……開始！」

ウェンディが開始の合図として手を挙げた瞬間に、アインハルトが突撃してくる。

「なっ!？」

右のピストルビットでアインハルトの足元にアクセルバレットを一発撃ち込む。

ジャンプして避けたアインハルトに左のピストルビットのエッジを胸部に向けて叩き込むが、アインハルトにギリギリで腕を交差、ガードされてしまう。

吹き飛んで距離を取ったところで、すかさずフォトンマシンガンを乱れ撃つ。

「霸王流……『旋衝破』。」

アインハルトが避けもせず、防御魔法も出さず構えた？何をする気だ？

攻撃を止めて様子を見ると、アインハルトは、フォトンマシンガンの弾丸型の魔力弾をキャッチボールで捕る要領で全て指で掴んで止めてしまった。それも、魔力弾の形を維持したまま。

「受け止めやがった！！」

アインハルトの驚き方を思わず自分でやってしまうが、それよりも先にアインハルトが受け止めた俺の攻撃をそのまま返してきた。

「ちいっ！」

やむを得ず、フォトンマシンガンで返された攻撃を全て撃ち落とす。当然、小爆発が沢山起きてアインハルトの姿が見えないぐらいの煙幕が出来てしまう。

「マスター、来ます！」

煙幕の中からアインハルトが右拳を突き出してきたことをサバーニヤの警告で察知した俺は紙一重で左に避けながら右のピストルビットを上に向けて右のストレートを顔に向かって突き出す。

「ピストルビットを浮遊、待機させます。」

女の子を殴るのはあまりやりたくないが、今は真剣勝負。

加減無しだ!!

「おりゃっ!」

だがそれも予測していたアインハルトは俺の右ストレートを左手で掴んで受けきる。

「ぬっぐうつ……はあっ!!」

苦悶の表情を浮かべながら、俺の右足を左足で踏みつけて逃げられないように抑える。

「霸王……」

アインハルトは野球の打撃のように足から腰への横回転という形でエネルギーを生み出す。

これは、ヴィヴィオがやられた技か!

「断空拳っ!!」

腹部を狙うアインハルトの右拳。この勝負はダウンした方が負け、たとえば装甲に傷一つ付けられなくても有効な攻撃だ!

「来やがっ……!?!」

突然、左腕だけ動かなくなった。

くそ、バインドかよ!

魔法が有りなら捕縛魔法もありということ。

そのことを分かっていたいなかった自分の失態に気付いた瞬間に、腹部に猛烈な衝撃が走る。

「ぐっ、ぬうううううううううう!!!!」

ミシツという亀裂が入る音がしながらも足と腹に力を込め、更に歯を食いしばって踏ん張る。

衝撃が止み、アインハルトが驚愕の表情をしながら動けずにいた。

「だ、断空拳を……受けきった……!!?」

「ははっ……結構痛かったぜっ……。じゃあ、次はこっちの番だ!!」

「accel bullet」

痛みに耐え、左手のピストルビットの銃口をアインハルトの腹部に向けて撃つ。

「うっ……ぐうっ!!」

予め上に投げて浮遊、待機させたピストルビットを下ろして右手に持って左脛を撃つ!

本当はピストルビットを上から撃ちまくるっていう指示も出来たが、

それは流石に卑怯な気がしたので止めた。

アインハルトは堪らず膝を付く。

「悪いが、チェックメイトだ！」

アインハルトの腹部に再び撃ち込む。

断空拳を受けられたショックがまだあったのか、防御も回避もせず当たり、敢えなく仰向けに倒れてダウンとなった。

「一本、そこまでっす！」

「アインハルトさん、ライルおじさん！」

試合が終わり、GUNDAMフォームを解除した瞬間に、俺も膝を着いた。

「いってて！参ったな、まさかサバーニャの装甲に罅入れるとはな。危うく意識が持ってかれるとこだった……。大丈夫か？」

俺が呼び掛けると、既に子供に戻って半身だけヴィヴィオに起こされてこっちを見ていた。

「大丈夫です。加減していただいたお陰で少し休めば動けるようになります。それよりも、参りました。やはり私が思った通り、ライルさんは強かったです。何より、何となくですが何か覚悟を持って戦っていたという感じがしました。」

「そうかい……。そりゃ受けた甲斐があったってもんだ……。」

アインハルトの僅かに見せた控えめな笑みを見て、俺も満足感で痛みを……

ズキンッ！

……やべっ、思ったより腹が痛い。結構重いパンチだったから無理もねえか。

「少し横にさせてくれ。」

そうして、俺たちは休憩をした後に、その場で解散となった。

深夜 1..06

フェイトの家に着いてすぐに、フェイトから職場で泊まることを受信メールで確認した俺は、いつも通り隣の高町・ディランディ家に夕食を食べて、風呂に入って、空いている一部屋でフェイトが俺の為に買ってきた布団を敷いて寝ている。最初、木製の床が気になっ
て寝れなかったが今は慣れてきて寝る事は出来ている。が、今日は別の理由で未だに寝つけなかった。

それは、アインハルトとの試合だ。

アインハルトがいかに覇王イングヴァルドの悲願を達成させようと必死になっているのか、少しぐらいだが解った。

それは、俺がアニューを戦って救おうとしていたあの気持ちと同じもののように感じた。

違いはあれど、救おうとしたのに救えなかった、その悔しさと悲しさを俺はあの断空拳という技を受けて感じた。

だが、一番の違いは俺がガンダムマイスターとして死んだ兄さんや家族、アニューの命を背負って生きると決めた時のような自分自身の覚悟を持っているか持っていないかということだ。自惚れとかではなく、何と言われようと揺らがない決意を含んだものだ。

アインハルトは、なまじ覇王の記憶を受け継いでいるために自分の決めたこととしてどこか消化しきれてないように思えた。とはいえ、こればかりは憶測でしかない上に聞くしかない。当然、本人が自分から言わない限り、周りから聞くのは無粋だ。何よりアインハルトが自分で越えなくてはいけない壁だ。

だが、多分良い出会いをしたあの子はきっと周りに支えられながら越えるだろう。

その最たるきっかけはヴィヴィオになる。あの子が今、一番アインハルトに近いからだ。

それは良い。

「なら俺に出来ることは何だ……?」

「マスターはガンダムマイスターです。」

枕元からサバーニヤの声がした。

「聞いていたのかサバーニヤ。」

「独り言が駄々漏れでしたよ。ブツブツと声に出して。」

気付かなかった……。

「はあ……。俺も年取っちゃまったなあ……。」

「30代前半で何を言っているんですか? 老け込むには早いですよ。」

「手厳しいな。で、お前が言いたいのは、どこへ行ってもガンダムマイスターで、アインハルトの邪魔になる奴がいたら、そういう時は率先して対応するっつうことだろ?」

「それは想像にお任せします。ですが、その時最良と思ったことをやるのが一番です。」

それだけじゃねえってことか。

「言われなくてもそのつもりだ。」

けど、ありがとよサバーニヤ。

「何か言いましたか？」

「いや、何でもねえ。」

これで、今日は寝れそうだ。

アインハルトside

夜 21..26

自宅に帰り、夜の軽いトレーニングを終えた私にノーヴェさんから通信が入りました。

>よう、お疲れさん。今日行けなくて悪かったな。<

「いえ、色々してくれたお蔭で試合が出来ました。ありがとうございます。」

>いやいや、実はあたしもライルさんの実力知りたかったし。それで、結果はどうだった？<

「見事に負けてしまいました。全力で断空拳を当てたのに耐えられてしまいました……。」

断空拳を耐え切られてしまった瞬間、頭が真っ白になってしまい何も出来なくなっていました。

>あれに耐えたのか……。<

「私から見ですが、ライルさんの強みは勝負強さだったように感じます。それに射撃も正確で、隙を突くのも容易にはありませんでした。今回は手加減もありましたが、本気を出されていたら多分、何もさせてもらえずに負けてました。」

実際私の戦い方を見ていた彼は、何度も足を狙ってきました。それもわざと外したのもあったりと。これだけでも彼の技量の高さを窺い知る事が出来ます。そうなれば、刹那という人もヴィヴィオのお父様もどんな実力なのか気になります。

>ライルさんも強えんだなあ……。うーん、合宿が楽しみになってきた！<

「はい、私も楽しみになってきました。」

>うんうん、これであとは二日経つのを待つばかりだ。じゃあ、お休み。<

「お休みなさい、ノーヴェさん。」

通信が切れ、私も汗を流すためにお風呂に入ります。

明後日が、楽しみです。

ティエリア side

ロックオン……ニール・デイルンディの生存と彼の子供が生まれた

ことを知ってから二週間余りが経った。

今週末にニールとアレルヤ、ライルを含めた一行がやってくるということで、僕はルーテシア、メガーヌ、ガリユーと共に持て成しの準備を進めていた。レイヤー建造物の建造、アスレチックフィールドの資材運び、ルーテシアが掘って当てた天然の温泉の改造、そして宿泊ロッジの掃除やベットメイキングなど色々やった。前半の施設は訓練、後半の施設は休憩用だ。思えば正直、施設建造や掃除ばかりやっていたと思う。だが、時々かくれんぼやアスレチックフィールドで遊んだりもした。すごく、いい経験になった。

それはいいのだが、一つ問題がある。

それは……

「ねえティエリア、これ着てみて？」

ロックオンの一件から、時々自分の部屋へ僕を連れては何かと女性ものの服を着せようとしてくるのだ。

どこかの女子高生の制服（○神学園）、ナース服、何所かで見たワインレッドのドレス、ヒラヒラでピンクの服（○リズムマイリヤ）など色々持って迫ってくる。そして、そういう時に限ってガリユーがいないし、メガーヌに助けを求めたら、逆にルーテシアに協力する始末。

「今日は、これよ！」

そしてルーテシアが持っているのは、メイド服……しかもミニスカだ。

第6話 覇王vs深緑の銃撃士（ガンナー）（後書き）

今回の話は、どうも詰め込みすぎたような気がします。それにアインハルトの技を早めに出すことになってしまったのも反省です。

次回からやっとう合宿編です。

その前にデカルトを出します。というより出さないと後に響くので必ず出します。

それと逆お気に入りユーザーが遂に100人を超えました。

登録してくださった皆さん、本当にありがとうございます！！

記念に何か書こうと思いますが、まだ決まっています。

決まったら活動報告で発表します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9106n/>

魔法少女リリカルなのはVivid～深緑の輝きは癒しと未来を創る光～

2011年11月13日21時20分発行